Wasada-ichi

稙田市遺跡

七瀬川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

大分県教育委員会

序　文

大分市西部を流れる大分川の支流に「七瀬川」という、美しい名前を持つ河川があります。七瀬川は久住山系の火山群地帯を水源とし、大分市宗方付近の沖積平野で本流の大分川と合流しています。七瀬川は農業用水としても利用され、地域生活と密着して広く親しまれており、その流域は大分市内の中でも最も豊かな自然に恵まれた地域のひとつであります。

しかし、その一方、河川災害の記録も近世以前から度々認められ、特に昭和28年の大洪水では河川の増水・氾濫により、大分市稙田地区が大きな被害を受けました。これらの災害を未然に防止するため、建設省によってショート・カット工法による河川改修工事が計画されてきました。

大分県教育委員会では、工事対象地区付近を「稙田市遺跡」と命名し、建設省九州地方建設局大分工事事務所からの委託を受け、昭和62年度から平成３年度の５年間におよぶ発掘調査を行なってきました。発掘調査の結果、縄文時代晩期から近代・現代にいたる様々な遺構・遺物が発見されました。特に、縄文晩期末の土器資料や室町時代の中世屋敷跡などの調査成果は、当地の地域文化の遺産として大変貴重なものと思われます。

本書は、発掘調査終了後２年間の整理期間を経て、これらの調査成果を収録したものであり、発掘調査の意義が広く理解されるとともに、教育・学術の振興と地域文化の向上・発展のために活用されることを期待いたします。

おわりに、調査開始時から御指導いただきました諸先生方をはじめ、調査に御協力いただきました関係者各位および地元の方々に対し、深く敬意を表すとともに厚く御礼を申し上げます。

平成６年３月

大分県教育委員会
教育長　宮　本　高　志

例　言

1．本書は、昭和62年度（1987年度）から平成３年度（1991年度）に発掘調査を実施した七瀬川河川改修工事に伴う稙田市遺跡（大分市大字市所在）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。

3．調査団の構成は、以下の通りである。

調査委員　渡辺　澄夫（別府大学教授　昭和62年度・昭和63年度）
賀川　光夫（別府大学教授　昭和62年度・平成元年度）
小田富士雄（北九州市立考古博物館館長　現福岡大学教授　昭和62年度）
中野　幡能（別府大学教授　昭和62年度）
豊田　寛三（大分大学教授　昭和62年度～平成元年度・平成３年度）
西別府元日（大分大学助教授　現広島大学教授　昭和62年度）
橋本　操六（県総務課参事　昭和63年度）
近藤　喬一（山口大学教授　平成元年度）
西谷　　正（九州大学教授　平成２年度）
下條　信行（愛媛大学教授　平成２年度）
後藤　昭六（県文化課長　昭和62年度）　小代　基雍（県文化課長　昭和63年度）
後藤　正二（県文化課長　平成元年度・平成２年度）　秋葉　正嗣（県文化課長　平成３年度）
徳丸　欽也（県文化課参事　昭和62年度）
後藤　宗俊（県文化課課長補佐　昭和62年度～平成元年度　現別府大学教授）
林　　英輝（県文化課課長補佐　平成２年度・平成３年度）

調査主任　渋谷　忠章（県文化課主幹兼埋蔵文化財第２係長　昭和62年度～平成元年度）
清水　宗昭（県文化課主幹兼埋蔵文化財第１係長　平成２年度・平成３年度）

調　査　員　高橋　　徹（県文化課主査　現大分市歴史資料館主幹）　坂本　嘉弘（県文化課主査）
牧尾　義則（同　主査）　村上　久和（同　主査）　西　　哲弘（同　主査）
小柳　和宏（同　主任）　吉田　　寛（同　主任　調査担当）
後藤　晃一（同　主事　現大分県立日田三隈高校教諭）
永松みゆき（同　嘱託　現大分県国東町教育委員会主査）
行時　志郎（同　嘱託　現日田市立博物館学芸員）
神田　高士（同　嘱託　現臼杵市教育委員会主事）
新宅　信久（同　嘱託　現福岡県粕屋町教育委員会主事）
後藤　幹彦（同　嘱託　現大分県大野町教育委員会文化財専門員）
清原　史代（同　嘱託　昭和63年度・平成元年度）　今泉　正子（同　嘱託　平成元年度）
阿部みゆき（同　嘱託）　安倍　聡子（同　嘱託　平成３年度）

調査補助員　池邊千太郎（立正大学学生　現大分市教育委員会技師）
河野　史郎（別府大学学生　現佐賀県神崎町教育委員会主事）
白木　　守（別府大学学生　現福岡県久留米市教育委員会主事）
橋本　一彦（別府大学学生　現大分県直入町教育委員会主事）
守田　隆彦（同志社大学学生）　安藤　栄治

4．赤色顔料の分析を成瀬正和氏（宮内庁正倉院事務所）・本田光子氏（別府大学）・岡田文男（京都造形芸術大学）に、出土木製品の樹種鑑定を能城修一氏（農水省森林総合研究所）に依頼し、玉稿を得た。

5．本書の編集は、吉田寛が担当した。

目　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．発掘調査区の位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ．発掘調査の概要
(1)調査の概要 …… 6
(2)縄文時代の遺構・遺物 …… 12
(3)弥生時代～古墳時代前期の遺構・遺物 …… 26
(4)古墳時代中・後期の遺構・遺物 …… 44
(5)古代の遺構・遺物 …… 85
(6)中世の遺構・遺物 …… 88
(7)近世以降の遺構・遺物 …… 106
Ⅳ．まとめ …… 124
Ⅴ．付論－自然科学的分析－
(1)稙田市遺跡から出土した木製品の樹種（能城修一） …… 126
(2)稙田市遺跡出土赤彩土器の科学的調査（成瀬正和・本田光子・岡田文男） …… 129

図版目次

Fig．1　稙田市遺跡周辺遺跡分布図 …… 3
Fig．2　稙田市遺跡周辺地形図と調査区位置図 …… 5
Fig．3　稙田市遺跡全体図 …… 7・8
Fig．4　年度ごとの調査推移(1) …… 9
Fig．5　年度ごとの調査推移(2) …… 10
Fig．6　縄文時代の遺構 …… 12
Fig．7　埋甕遺構ＳＸ１ …… 12
Fig．8　埋甕実測図 …… 13
Fig．9　ＳＬ１出土土器① …… 14
Fig.10　ＳＬ１出土土器② …… 15
Fig.11　ＳＬ１出土土器③ …… 16
Fig.12　ＳＬ１出土土器④ …… 17
Fig.13　ＳＬ１出土石器 …… 19
Fig.14　他遺構に混入した縄文時代遺物① …… 20
Fig.15　他遺構に混入した縄文時代遺物② …… 21
Fig.16　他遺構に混入した縄文時代遺物③ …… 22
Fig.17　弥生時代から古墳時代前期の遺構 …… 26
Fig.18　ＳＬ２出土遺物と関連資料 …… 27
Fig.19　ＳＤ11・ＳＤ12出土遺物 …… 27
Fig.20　ＳＤ１実測図 …… 28
Fig.21　ＳＤ１土層断面図 …… 29
Fig.22　ＳＤ１　90年度調査区（Ｅ区）の土器出土状況 …… 30
Fig.23　ＳＤ１　87年度調査区（Ｂ区）出土遺物① …… 32
Fig.24　ＳＤ１　87年度調査区（Ｂ区）出土遺物② …… 33
Fig.25　ＳＤ１　89年度調査区（Ｃ区）出土遺物① …… 34
Fig.26　ＳＤ１　89年度調査区（Ｃ区）出土遺物② …… 34
Fig.27　ＳＤ１　90年度調査区（Ｅ区）出土遺物① …… 35
Fig.28　ＳＤ１　90年度調査区（Ｅ区）出土遺物② …… 36
Fig.29　ＳＤ１　90年度調査区（Ｅ区）出土遺物③ …… 37
Fig.30　ＳＤ１　90年度調査区（Ｅ区）出土遺物④ …… 38
Fig.31　ＳＤ１　90年度調査区（Ｅ区）出土遺物⑤ …… 39

Fig.32　ＳＤ２出土遺物 …… 40
Fig.33　ＳＤ３～10と遺物出土地点 …… 41
Fig.34　ＳＤ６とＳＤ８の接続部 …… 42
Fig.35　ＳＤ３～10出土遺物 …… 42
Fig.36　ＳＤ９出土勾玉 …… 42
Fig.37　稙田市遺跡における弥生時代
後期末から古墳時代前期の溝 …… 43
Fig.38　古墳時代中・後期の遺構 …… 44
Fig.39　住居跡等遺構配置図 …… 45
Fig.40　ＳＨ13実測図 …… 46
Fig.41　ＳＨ13出土遺物 …… 46
Fig.42　ＳＨ６実測図 …… 47
Fig.43　ＳＨ６出土遺物① …… 47
Fig.44　ＳＨ６出土遺物② …… 48
Fig.45　ＳＨ22実測図 …… 49
Fig.46　ＳＨ22出土遺物 …… 49
Fig.47　ＳＨ１・ＳＨ12実測図 …… 50
Fig.48　ＳＨ１出土遺物① …… 51
Fig.49　ＳＨ１出土遺物② …… 52
Fig.50　ＳＨ１出土遺物③ …… 52
Fig.51　ＳＨ２実測図 …… 53
Fig.52　ＳＨ３実測図 …… 53
Fig.53　ＳＨ３カマド実測図 …… 53
Fig.54　ＳＨ３出土遺物① …… 54
Fig.55　ＳＨ３出土遺物② …… 54
Fig.56　ＳＨ４・ＳＨ５実測図 …… 55
Fig.57　ＳＨ４・ＳＨ５出土遺物 …… 55
Fig.58　ＳＨ７実測図 …… 56
Fig.59　ＳＨ７出土遺物 …… 56
Fig.60　ＳＨ８実測図 …… 57
Fig.61　ＳＨ８出土遺物① …… 57
Fig.62　ＳＨ８出土遺物② …… 58
Fig.63　ＳＨ９実測図 …… 58
Fig.64　ＳＨ９カマド実測図 …… 58
Fig.65　ＳＨ９出土遺物 …… 59
Fig.66　ＳＨ10実測図 …… 60
Fig.67　ＳＨ10出土遺物① …… 60
Fig.68　ＳＨ10出土遺物② …… 61
Fig.69　ＳＨ11実測図 …… 62
Fig.70　ＳＨ11カマド実測図 …… 62
Fig.71　ＳＨ11出土遺物 …… 62
Fig.72　ＳＨ14実測図 …… 63
Fig. 73　ＳＨ14出土遺物 …… 63
Fig. 74　ＳＨ15実測図 …… 63
Fig. 75　ＳＨ15出土遺物 …… 63
Fig. 76　ＳＨ16・ＳＨ17実測図 …… 64
Fig. 77　ＳＨ16出土遺物① …… 64
Fig. 78　ＳＨ16出土遺物② …… 65
Fig. 79　ＳＨ18実測図 …… 65
Fig. 80　ＳＨ19・ＳＨ20実測図 …… 66
Fig. 81　ＳＨ19出土遺物 …… 66
Fig. 82　ＳＨ21実測図 …… 67
Fig. 83　ＳＨ21出土遺物 …… 67
Fig. 84　ＳＨ23カマド周辺 …… 67
Fig. 85　ＳＨ23・ＳＨ24実測図 …… 68
Fig. 86　ＳＨ23出土遺物① …… 69
Fig. 87　ＳＨ23出土遺物② …… 70
Fig. 88　ＳＨ23出土遺物③ …… 71
Fig. 89　ＳＨ25実測図 …… 72
Fig. 90　ＳＨ25出土遺物 …… 72
Fig. 91　ＳＢ１実測図 …… 73
Fig. 92　ＳＢ１出土遺物 …… 73
Fig. 93　ＳＫ１実測図 …… 73
Fig. 94　ＳＫ１出土遺物 …… 73
Fig. 95　ＳＫ２実測図 …… 74
Fig. 96　ＳＫ２出土遺物 …… 74
Fig. 97　流路ＳＲ１と接続する溝 …… 75
Fig. 98　ＳＲ１杭列周辺の状況 …… 76
Fig. 99　流路ＳＲ１土層図 …… 76
Fig.100　流路ＳＲ１出土遺物① …… 77
Fig.101　流路ＳＲ１出土遺物② …… 78
Fig.102　流路ＳＲ１出土遺物③ …… 79
Fig.103　流路ＳＲ１出土遺物④ …… 80
Fig.104　流路ＳＲ１出土耳環 …… 81
Fig.105　ＳＤ13・15・19・20出土遺物 …… 81
Fig.106　ＳＤ21実測図 …… 82
Fig.107　ＳＤ21出土遺物 …… 82
Fig.108　ＳＬ２出土勾玉 …… 82
Fig.109　ＳＬ２出土遺物 …… 82
Fig.110　稙田市遺跡における古墳時代
中～後期の遺構 …… 83
Fig.111　古代の遺構 …… 85
Fig.112　ＳＤ22～24実測図 …… 86
Fig.113　ＳＤ22・23出土遺物 …… 86

Fig.114　緑釉陶器実測図 …… 86
Fig.115　古代の遺構（ＳＤ22～24）の
　　位置と「稙田条里」 ……87
Fig.116　中世の遺構 …… 88
Fig.117　中世屋敷跡と敷地内に位置する遺構 … 89
Fig.118　ＳＤ25出土遺物① …… 90
Fig.119　ＳＤ25出土遺物② …… 91
Fig.120　中世屋敷敷地内の掘立柱建物 …… 92
Fig.121　ＳＥ１実測図 …… 93
Fig.122　ＳＥ１出土遺物 …… 93
Fig.123　ＳＥ２実測図 …… 94
Fig.124　ＳＫ３実測図 …… 94
Fig.125　ＳＫ３出土遺物 …… 94
Fig.126　ＳＫ４実測図 …… 95
Fig.127　ＳＫ４出土遺物 …… 95
Fig.128　ＳＫ５実測図 …… 96
Fig.129　ＳＫ５出土遺物 …… 96
Fig.130　ＳＴ１実測図 …… 96
Fig.131　ＳＴ１出土遺物 …… 96
Fig.132　ＳＴ１出土土錘 …… 96
Fig.133　ＳＸ２出土遺物① …… 97
Fig.134　ＳＸ２出土遺物② …… 98
Fig.135　ＳＥ３実測図 …… 99
Fig.136　ＳＥ３出土遺物 …… 99
Fig.137　ＳＴ２実測図 …… 99
Fig.138　ＳＢ10～16実測図 …… 100
Fig.139　ＳＰ１実測図 …… 101
Fig.140　ＳＰ１出土遺物 …… 101
Fig.141　ＳＥ４実測図 …… 101
Fig.142　ＳＥ５と出土遺物 …… 102
Fig.143　ＳＫ６実測図 …… 103
Fig.144　ＳＫ６出土遺物 …… 103
Fig.145　ＳＫ７実測図 …… 103
Fig.146　ＳＫ７出土遺物 …… 104
Fig.147　中世屋敷跡と柱穴群 …… 105
Fig.148　近世以降の遺構 …… 106
Fig.149　ＳＤ26出土遺物 …… 107
Fig.150　ＳＤ27出土遺物 …… 107
Fig.151　ＳＤ27出土銅銭 …… 107
Fig.152　ＳＤ28出土遺物 …… 108
Fig.153　ＳＤ29出土遺物① …… 110
Fig.154　ＳＤ29出土遺物② …… 111
Fig.155　ＳＤ29出土遺物③ …… 112
Fig.156　ＳＤ29出土遺物④ …… 113
Fig.157　ＳＤ29出土遺物⑤ …… 114
Fig.158　ＳＤ30出土遺物 …… 115
Fig.159　ＳＤ31出土遺物 …… 116
Fig.160　ＳＤ32出土遺物① …… 117
Fig.161　ＳＤ32出土遺物② …… 118
Fig.162　ＳＤ33出土遺物① …… 119
Fig.163　ＳＤ33出土遺物② …… 120
Fig.164　ＳＤ34出土遺物 …… 120
Fig.165　ＳＤ34出土遺物 …… 120
Fig.166　ＳＥ６出土遺物 …… 121
Fig.167　ＳＥ７実測図 …… 121
Fig.168　ＳＥ７出土遺物 …… 121
Fig.169　ＳＸ３実測図 …… 121
Fig.170　ＳＸ３出土遺物 …… 121
Fig.171　ＳＸ４出土遺物 …… 122
Fig.172　ＳＸ５出土遺物 …… 122
Fig.173　90年度調査区（Ｇ区）出土遺物 …… 122
Fig.174　ＳＤ27・ＳＤ28の位置 …… 123
Fig.175　大分県稙田市遺跡から出土した
　　木製品の顕微鏡写真 …… 128
Fig.176　分析試料 …… 130
Fig.177　稙田市、下黒野遺跡出土赤彩土器の
　　断面写真 …… 134

表目次

Tab.1　ＳＬ１出土土器観察表 …… 18
Tab.2　ＳＬ１出土石器観察表 …… 19
Tab.3　他遺構出土縄文土器観察表 …… 23
Tab.4　他遺構出土石器観察表 …… 23
Tab.5　縄文時代晩期土器の組成 …… 24
Tab.6　深鉢の分類 …… 24
Tab.7　浅鉢の分類 …… 25
Tab.8　遺構一覧表(1) …… 125
Tab.9　遺構一覧表(2) …… 126
Tab.10　稙田市遺跡の木製品の樹種 …… 127
Tab.11　Ｘ線分析結果と顔料の種類 …… 130

写真図版

PL. 1　稙田市遺跡全景①　…… 137
PL. 2　稙田市遺跡全景②　…… 138
PL. 3　稙田市遺跡全景③　…… 139
PL. 4　稙田市遺跡全景④　…… 140
PL. 5　縄文時代の遺構・遺物　…… 141
PL. 6　弥生時代～古墳時代前期の遺構　…… 142
PL. 7　古墳時代の遺構①　…… 143
PL. 8　古墳時代の遺構②　…… 144
PL. 9　古墳時代の遺構③　…… 145
PL.10　古墳時代の遺構④　…… 146
PL.11　古墳時代の遺構⑤　…… 147
PL.12　古墳時代の遺構⑥　…… 148
PL.13　古墳時代の遺構⑦　…… 149
PL.14　古墳時代の遺構⑧　…… 150
PL.15　古墳時代・古代の遺構　…… 151
PL.16　中世の遺構①　…… 152
PL.17　中世の遺構②　…… 153
PL.18　中世の遺構③　…… 154
PL.19　中世の遺構④　…… 155
PL.20　中世の遺構⑤・近世の遺構①　…… 156
PL.21　近世の遺構②　…… 157
PL.22　弥生時代後期～古墳時代前期の遺物①　…… 158
PL.23　弥生時代後期～古墳時代前期の遺物②　…… 159
PL.24　弥生時代後期～古墳時代前期の遺物③　…… 160
PL.25　古墳時代の遺物①　…… 161
PL.26　古墳時代の遺物②　…… 162
PL.27　古墳時代・古代の遺物　…… 163
PL.28　中世の遺物①　…… 164
PL.29　中世の遺物②　…… 165
PL.30　近世の遺物①　…… 166
PL.31　近世の遺物②　…… 167
PL.32　近世の遺物③　…… 168
PL.33　近世の遺物④　…… 169
PL.34　近世の遺物⑤　…… 170
PL.35　近世の遺物⑥　…… 171
PL.36　近世の遺物⑦　…… 172
PL.37　近世の遺物⑧　…… 173

Ⅰ．調査に至る経過

稙田市遺跡は大分県大分市大字市に所在し、大分川の支流である七瀬川流域左岸の沖積低地上に立地する。この一帯は埋蔵文化財包蔵地と知られており、「稙田条里遺跡」として周知されている。ただ、この稙田条里遺跡として周知されている範囲は広範におよぶことから、今回の七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査区付近を新たに「稙田市遺跡」と命名した。

七瀬川は、江戸時代後期に編纂された『豊後国志』には、「赤坂川」と記載されている。しかし、現在では赤坂川の名前は残っておらず、「七瀬川」と呼称されている。七瀬川はＳ字形の蛇行部分が多数認められる河川であり、その名称の由来は上流から一ノ瀬、鬼坊瀬など七つの瀬が存在することにあるといわれる。当該河川流域の沖積低地や台地上には、縄文時代から中世にいたる多くの遺跡が分布している。またこの一帯は、「和名抄」にみえる大分郡稙田郷に属し、12世紀前半頃からは摂関家領荘園の稙田荘となり、保元の乱（1156年）以降は後白河天皇の御院領となり、その後は皇室御領として相伝される地域である。

今回「稙田市遺跡」と命名した地点の南側では、七瀬川が大きくＳ字状に蛇行している部分がある。当該部分は台風や大雨などの増水時に、洪水を誘発しやすい地点となっており、事実昭和28年（1953）６月の大洪水では大分市稙田地区が大きな被害を受けたことが記録されている。その後も危険な状態は続いており、現状の河道では洪水の再発は免れない状況にある。

さてその一方、七瀬川沿岸周辺は大分市の新産業都市指定（1964年１月）に伴い、産業・経済発展の影響を強く受けてきた。特に近年では、大分市街地に対応する住宅地として大規模住宅団地の開発や田畑の宅地化が急激に進行し、人口および資産の増大が進んでいる。今回の発掘調査地点付近も例外ではなく、このため上記地域における自然災害からの安全性の向上を図るため、河川改修工事（「七瀬川市捷水路工事」）の早期着工が緊急かつ重要な課題となってきた。こうしたことから、1987年３月に建設省大分工事事務所より、工事の実施設計について正式な説明と発掘調査の依頼があり、同年６月より工事の進捗状況に合わせて順次調査を実施することとなった。

七瀬川河川改修に伴う工事対象地は、工事計画によると幅約90m、延長約685mの約61,650㎡である。大分県教育委員会では、この工事対象面積のうち実際に発掘調査が可能な地点すべてを調査対象地区とした。現地での発掘調査は1987年６月より1992年２月の５年度にわたって行ない、最終的な調査対象面積は約34,000㎡におよぶこととなった。

調査対象地区が沖積低地上に立地するため、発掘調査の現場では湧水と降雨による調査区の水没に悩ませられることになった。また年度によっては、実際の工事と並行して発掘調査を進めた地点もあり、このような地点では工事日程との兼ね合いから、柱穴間の配列や切り合い関係などを十分把握しないままに、水揚げの終了した場所から順次遺構の掘り下げを強行しなければならなかった場面もあった。また、原位置に置いていた遺物が、翌日に来てみると湧水や水没のため流出しているという状況も度々であった。

以上のような困難と発掘調査時での不手際もあり、遺跡からの情報を100パーセント引き出せたとはいえない部分もあったが、調査の結果としては縄文時代晩期後半から近代・現代に至る様々な遺構・遺物が検出され、当該地点の土地利用の変遷を知るうえで重要な資料となった。特に、縄文時代晩期末の刻目突帯文土器や古墳時代中期の５世紀末前後に比定されるカマドを持つ住居跡、および溝で囲まれた中世屋敷跡などは東九州地域での標式的な遺構・遺物になり得るものと考えられる。

Ⅱ．発掘調査区の位置と歴史的環境

稙田市遺跡は、大分市西部を流れる大分川の支流である七瀬川流域に形成された沖積低地上に立地する（Fig.1・2）。稙田市遺跡をのせる沖積低地は北東側を大分川によって、西側から南側を七瀬川および霊山（標高596m）から緩やかにのびる丘陵地帯によって、北側から東側を大分市宗方・田原・木ノ上付近に発達する独立丘陵によってそれぞれ区切られており、地形的にも完結した地域となっている。試みに、稙田市遺跡を中心として半径約2㎞の円を描くとすれば、上記の丘陵や沖積低地がほぼこの円内に収まることがわかる。この範囲には、縄文時代晩期から中・近世にいたる多くの遺跡が分布している。以下、考古学的な所見を中心に当該地域の歴史的環境を概観したい。

旧石器時代から縄文時代後期までは、顕著な遺跡は知られていない。ただ雄城台遺跡[1]や稙田市遺跡で若干の石器遺物が採集されているにとどまる。縄文時代晩期になると、沖積低地上に比較的良好な遺物包含層が認められるようになる。大分市大字宗方字二反田[2]では縄文晩期中頃の上菅生B式（黒川式併行）の包含層が、稙田市遺跡では縄文晩期後半の下黒野式（夜臼式単純期）の埋甕・包含層が検出されている。このような低地での遺跡立地の様相は、当地域での水稲耕作の伝播時期を示唆する上で興味深いが、当該時期の籾痕土器や石庖丁あるいは水田遺構そのものの発見はいまだなされていない。

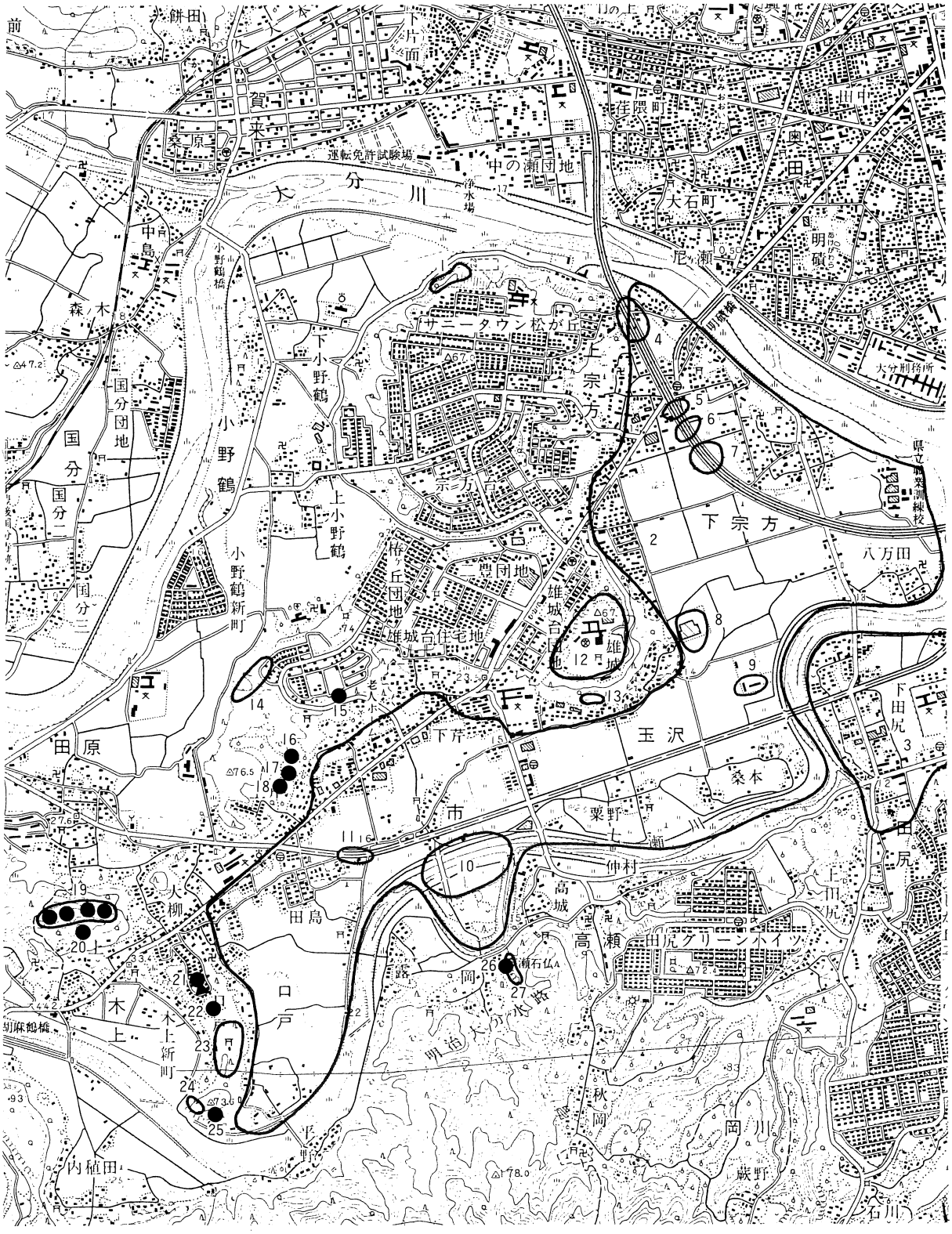
弥生時代の遺跡で、まず特筆されるのは雄城台遺跡[3]である。雄城台遺跡は比高差50m前後の丘陵上に立地する弥生時代前期末から後期末までの歴代遺跡で、弥生時代における当地の拠点的な集落と考えてよい。弥生時代後期には環溝を持つようになり、集落の廃絶時には多量の土器を環溝内に廃棄している。また沖積低地上でも弥生時代中期以降の遺跡が分布しており、深町遺跡[4]では弥生時代中期の溝が、国道210号線バイパス建設に伴う稙田条里遺跡の調査区内では後期の住居跡が検出されている。

弥生時代後期末までの時間幅の中で、雄城台遺跡は廃絶されるが、その後の集落立地の主体は丘陵上から沖積低地上に移るようである。大分市大字玉沢付近（国道210号線バイパス建設に伴う稙田条里遺跡）[5]では、4世紀代に比定される布留式古段階（古墳時代前期）の土器を出土する溝や住居跡が検出されている地点があり、この周辺が当時の拠点的集落であった可能性が考えられる。また、稙田市遺跡でも水田経営に関連すると思われる溝が検出されている。

古墳時代中期になると、大分市木ノ上・田原付近の丘陵上に古墳が築造されるようになる。古墳群の中でも盟主的なものとしては、大分市大字木ノ上字原に所在する御陵古墳[6]があげられる。御陵古墳は全長75m以上を測る前方後円墳で、築造時期は5世紀前半代（5～6期）[7]に比定される。内部主体には箱形石棺と推定される2基の土壙が検出され、副葬品には玉類や鉄器のほか三角板革綴短甲破片などが認められる。1968年に宅地造成に伴い発掘調査が行なわれ、現在は消滅している。その他、5世紀代に比定される古墳としては下迫古墳[8]・世利門古墳[9]・山伏古墳群・浅草神社古墳群などがあり、数基が群在して古墳群をなすものも認められる。また、5世紀後半代には初源期の横穴墓も出現しているようで、高来山横穴墓[10]では珠文鏡を出土している。これらの墳墓群に対応する集落は現状では明確でないが、稙田市遺跡では5世紀後半代の集落が検出されており、両者の関係が注目される。

古墳時代後期になると、沖積平野を取り巻く丘陵斜面や崖面に横穴墓が多数造営されるようになる。大曽横穴墓群[11]・漆間横穴墓群・木ノ上峠横穴墓群[12]・土肥横穴墓群・岩井崎横穴墓群・雄城台下横穴墓群・高瀬横穴墓群などがそれぞれ数基から数十基の単位で群集している。これに関連して、沖積低地上に立地する稙田市遺跡では水田経営に関連すると推定される溝が、大分市大字玉沢の国道210号線バイパス建設に伴う稙田条里遺跡の調査範囲では水田の畦畔状遺構が検出されており、この付近が上記の墳墓群の造営主体者の生産基盤であったことが推定されよう。

大分市大字下宗方・玉沢・市・口戸付近の水田には、現状で約一町（約108m）四方の耕作区画[13]が観察され、これらが「稙田条里遺跡」として周知されていることは前述した。稙田市遺跡ではこの条里的区画を踏襲する東



1．小野鶴横穴墓群　2．玉沢地区条里跡　3．下田尻地区条里跡　4．北の後遺跡　5．六反田遺跡
6．山伏田遺跡　7．二反田遺跡　8．深町遺跡　9．植田平石遺跡　10．植田市遺跡
11．ガランジ遺跡　12．雄城台遺跡　13．雄城台下横穴墓群　14．大曽横穴墓群　15．下迫古墳
16．虎御前古墳　17．高来山横穴墓群　18．世利門古墳　19．山伏古墳群　20．木ノ上峠横穴墓群
21．御陵古墳　22．千人塚古墳　23．浅草神社古墳群　24．岩崎横穴墓群　25．口戸磨崖仏
26．高瀬石仏　27．高瀬横穴墓群

Fig．1　植田市遺跡周辺遺跡分布図（S＝1/25,000）

西方向の奈良・平安期の溝が検出されているが、調査区の制約から条里との関わりを積極的に想定することはできない。

中世以降、この付近は「稙田荘」と呼称される荘園となる。稙田荘は重岡名・千歳名・松竹名・行広名・福重名・光吉名・上義名・乙犬名・永富名・吉藤名の10名からなるが、佐藤満洋の復元案(14)によれば、稙田市遺跡の周辺は「稙田荘千歳名」に属することになる。今回の調査では15世紀後半から16世紀前半に比定される屋敷跡が検出されており、稙田荘を実質的に経営した稙田氏との関連が想定される。

近世になると現在の大分市大字市付近は豊後臼杵藩領に属し、「市村」あるいは「稙田市村」と呼称されるようになる。18世紀以降は享保井路・嘉永井路などの水田潅漑施設の再開発が行なわれ、稙田市村の住人もその事業に度々動員されたことが古文書上に記録されている。

註 (1) 高橋信武『雄城台一第8次調査の概要一』(大分県教育委員会 1987年)
(2) 九州横断自動車道大分一米良間建設に伴う試掘調査が行なわれている。染谷和徳氏の教示による。
(3) 註(1)に同じ。
(4) 綿貫俊一『深町遺跡』(大分県教育委員会 近刊予定)
(5) 小柳和宏・綿貫俊一氏の教示による。
(6) 賀川光夫・小田富士雄『御陵古墳緊急発掘調査』(大分県文化財調査報告第24輯 大分県教育委員会 1972年)
(7) 田中裕介「豊後」『前方後円墳集成 九州編』(山川出版社 1992年)
(8) 渋谷忠章「大分地方の古墳」『えとのす29 豊(大分)の考古学』(新日本教育図書 1985年)
(9) 賀川光夫「五遺骸以上合葬の一例」『考古学雑誌』第44巻第1号(1958年)
(10) 杉崎重臣「木ノ上・高来山ノ横穴古墳」(『大分県地方史』第32・33号 1964年)
(11) 池邊千太郎「豊前・豊後の横穴墓形態変遷論」(『おおいた考古』第3集 古墳時代特集 1990年)
(12) 賀川光夫・小田富士雄・鈴木重治『昭和43年度緊急発掘調査概要一御陵古墳とその周辺一』(大分県教育委員会 1969年)
(13) 兼子俊一「大分県下の条里遺構」(『大分県地方史』第4号 1955年)
(14) 佐藤満洋「天正末期の豊後国稙田荘について一稙田荘名々給人注文写の研究一」(『大分県地方史』第88号 1978年)

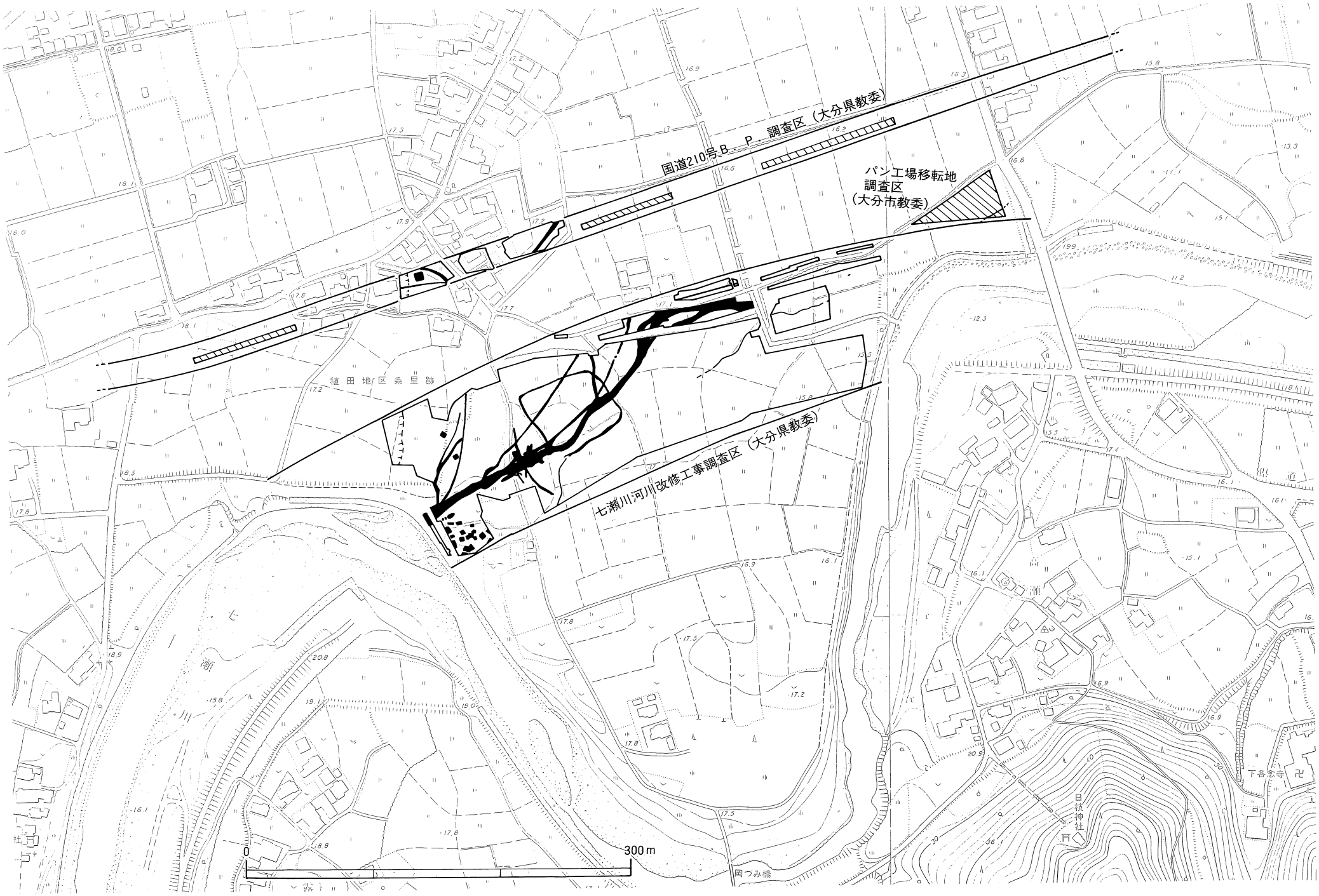


Fig. 2　種田市遺跡周辺地形図と調査区位置図

Ⅲ．発掘調査の概要

(1) 調査の概要

1987年６月から1992年２月の５年度にわたって行なわれた調査対象総面積約34,000㎡におよぶ稙田市遺跡の発掘調査では、縄文時代晩期から近世・近代にいたる様々な遺構・遺物が認められた（Fig.３）。発見された遺構・遺物を時代順に示すと、次のようになる。

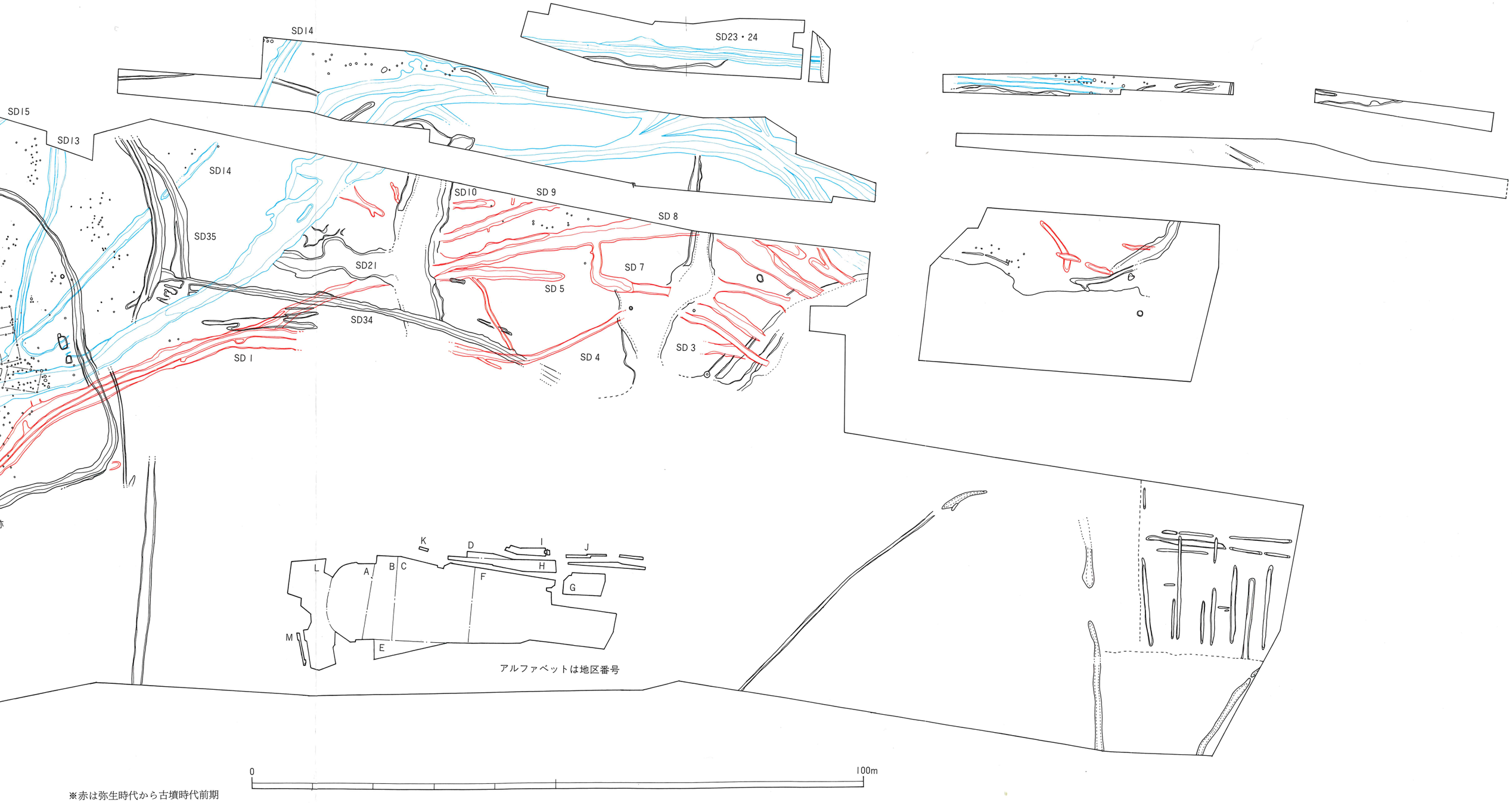
縄文時代	埋甕遺構（ＳＸ１）・刻目突帯文土器（下黒野式）の包含層（ＳＬ１）
弥生時代～古墳時代前期	弥生時代前期の包含層・弥生時代後期の溝（ＳＤ11・ＳＤ12）・弥生時代後期末～古墳時代前期の溝（ＳＤ１）・ＳＤ１に付属する溝（ＳＤ２～ＳＤ10）
古墳時代中・後期	流路（ＳＲ１）および流路に付属する溝（ＳＤ13～21）・住居跡25棟（ＳＨ１～25）・掘立柱建物１棟（ＳＢ１）・土坑３基（ＳＫ１～３）
古代（奈良・平安時代）	溝３条（ＳＤ22～24）ほか
中世	溝で囲まれた屋敷跡およびその付属施設・屋敷跡に先行する井戸や注穴など・その他の掘立柱建物、井戸（ＳＥ１～５）、柱穴、土坑ほか
近世以降	集石遺構（ＳＸ２）・溝（ＳＤ26～35）・井戸（ＳＥ６・７）ほか

以下、年度ごとの発掘調査の推移について、簡単に触れておきたい（Fig.４・５参照）。

1987年度　稙田市遺跡の調査に着手した最初の年度である。工事対象区のうち、最初の工事着工区である橋梁部（「印鑰橋新設工事」）を中心に約4、000㎡の発掘調査を行なった。橋梁工事対象区には大分市大字市から大字高瀬へ至る里道が存在しており、この道を挟んで西側をＡ区、東側をＢ区と仮称した。1987年度の発掘調査はこのＢ区全域とＡ区の一部を対象とした。発掘調査の結果、近世の石組み溝（ＳＤ27･28）や井戸（ＳＥ７）、溝で囲まれた中世屋敷跡の一部、平安時代の溝（ＳＤ22）、古墳時代中期から後期の流路（ＳＲ１）とそれに付属する溝および弥生時代後期末から古墳時代前期の溝（ＳＤ１）などを検出した。

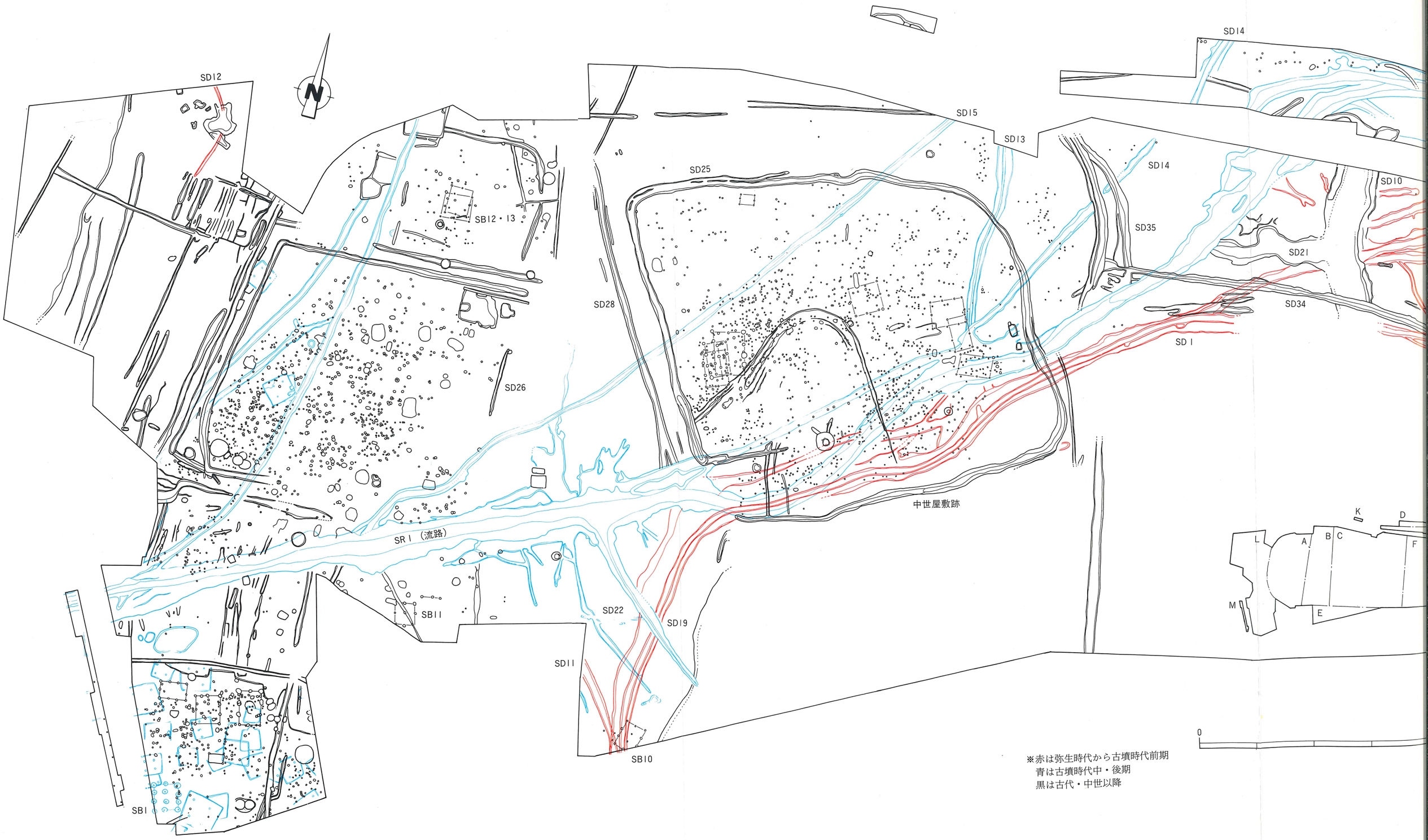
1988年度　大字市から大字高瀬へ至る里道を除去するとともに、前年度に掘り残したＡ区全域を完掘した。Ａ区では中世の井戸２基（ＳＥ４・５）と多数の注穴群を検出し、溝で囲まれた屋敷の西側にも集落が広がることが確認できた。また縄文時代晩期終末の包含層や埋甕遺構、５世紀末前後に比定されるカマドを有する住居跡（ＳＨ23）、古墳時代の流路ＳＲ１の延長部、近世の溝などを検出した。このうち縄文時代晩期終末の包含層からは、刻目突帯文土器や丹塗り磨研壺などが出土した。さらにＢ区で検出された中世屋敷跡を全掘する目的で、その東側をＣ区と仮称し、表土剝ぎを行なった。しかし、中世屋敷跡の規模が当初の予想よりも大きく、北辺・西辺の溝を完掘したに留まり、東辺の一部と南辺の溝が未検出となってしまった。また、この部分の下層に存在する古墳時代の流路ＳＲ１や弥生時代後期末から古墳時代前期の溝ＳＤ１の延長部の検出・掘り下げも、次年度に回すこととした。調査面積はＡ区約1,500㎡とＣ区約2,500㎡の計約4,000㎡となる。

1989年度　本年度はＣ区と仮称した地区の掘下げと拡張を主目的として、調査を進行させた。その結果、中世屋敷跡の南辺溝を検出するとともに、中世の遺構面の下層に一昨年度検出した古墳時代の流路ＳＲ１や弥生時代後期末から古墳時代前期の溝ＳＤ１の延長部を確認できた。また、新たに近世の石組み溝や５世紀後半代の溝ＳＤ13なども検出した。Ｃ区の遺構の掘り下げをほぼ終了した後、Ｃ区の北側をＤ区と仮称し、重機による表土剝ぎを行なったところ、やはり古墳時代後期の流路ＳＲ１の延長部を確認し、余力があったのでこの地区の遺構の掘り下げも行なった。航空写真の撮影終了後、遺構の希薄な部分にダメ押しのトレンチを入れ、谷状地形の一部を調査した。この部分では下城式土器などを少量含む弥生時代前期の包含層なども検出できた。本年度の調査面積は、Ｃ区とＤ区の合計約9,800㎡である。ただし、このうち約2,500㎡は前年度調査部分の下層の面積となるので、新たに拡張した面積は約7,300㎡となる。



※赤は弥生時代から古墳時代前期
青は古墳時代中・後期
黒は古代・中世以降

Fig. 3　稙田市遺跡遺構配置図（S＝1/600）



※赤は弥生時代から古墳時代前期
青は古墳時代中・後期
黒は古代・中世以降

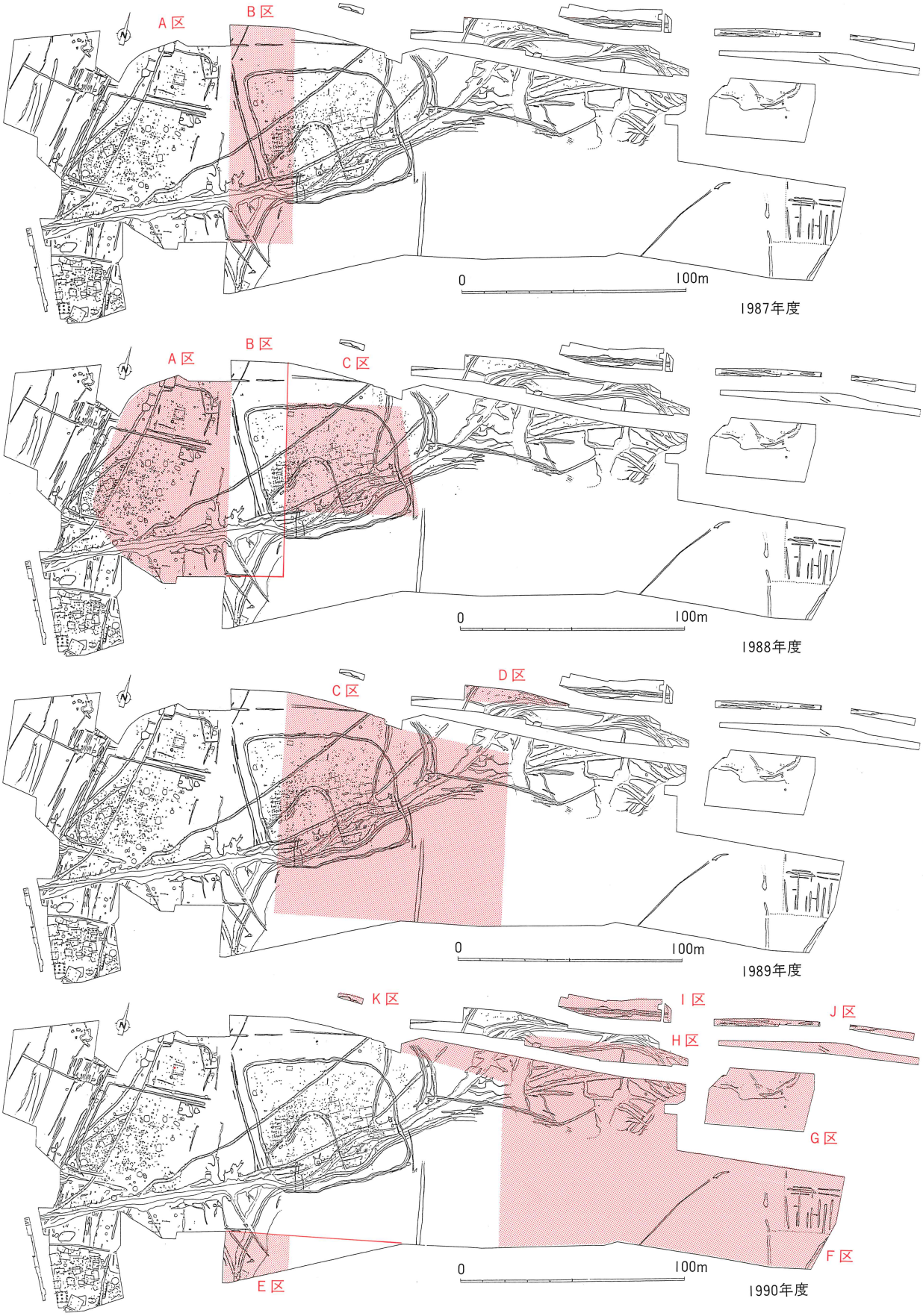


Fig. 4　年度ごとの調査推移(1)

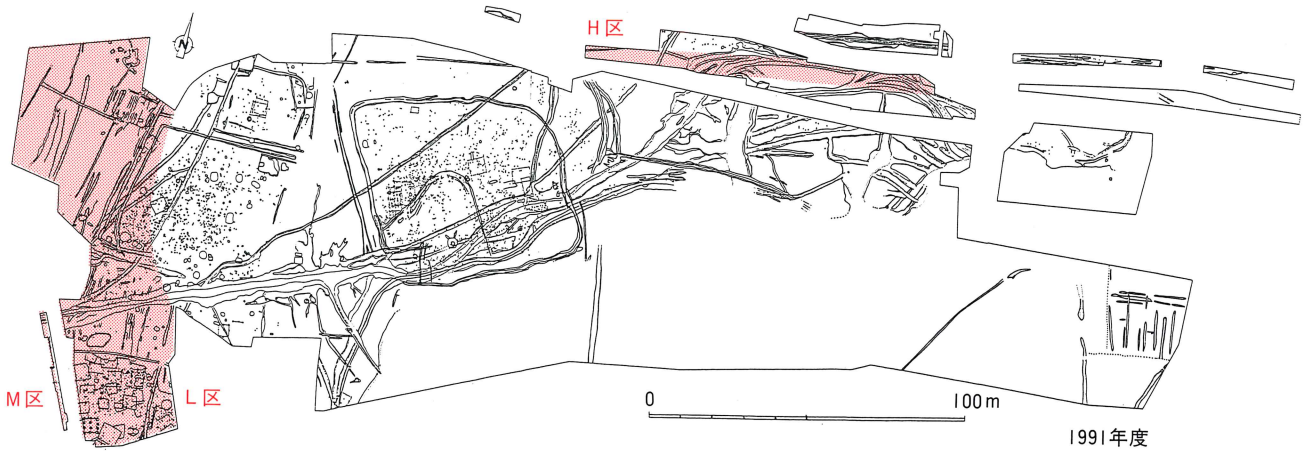


Fig. 5　年度ごとの調査推移(2)

1990年度　工事対象区東側の調査区拡張を主目的として、調査を進行させた。道路や水路などを境界として、本年度の調査区をE～K区と仮称した。昨年度C区とした地区の東側に位置するF区ではまとまった面積を調査できたが、E・G～K区では現道や工事用道路を避けて調査区を設定したため、分断された小面積の調査となった。E区では弥生時代後期末から古墳時代前期の溝SD1をはじめとする遺構の延長部や中世の総柱建物SB10などを検出した。F区・H区では前年度までに検出されていた溝の延長部のほか、F区では中世に比定される柱穴（SP1）、備前焼の甕の破片と「サシ」の状態にあった銅銭が共伴した土坑（SK4）などが検出された。I区・J区では切り合い関係にある8世紀前半代の溝が2条検出され（SD23・24）、条里の区画想定ラインとの関係が検討課題となるものである。本年度の調査面積は、E区が約800m²、F区が約9,700m²、G区が約1,250m²、H区が約240m²、I区が約4500m²、J区が約200m²、K区が約25m²の合計約12,700m²である。

1991年度　本年度は、稙田市遺跡における現地での調査の最終年度に当たる。昨年度調査を行なったH区の拡張を行なうとともに、1988年度・1989年度に調査を行なったA区の西側をL区、仮設水路を挟んでさらにL区の西側をM区と仮称し、発掘調査を進行させた。本年度の調査で特に注目すべきものは、L区東側およびM区で検出された古墳時代の住居跡群（SH1～22・25）である。本住居跡群は5世紀後半代から6世紀初頭前後に比定され、前年度までに検出されていた古墳時代の流路SR1の存続時期の一部とも対応している。5世紀末前後に比定される須恵器（TK23～47段階）を出土する住居跡の中には造り付けのカマドを有するものがあり、大分平野周辺におけるカマドの出現を考えるうえで良好な資料となると考える。またL区西側では、縄文時代晩期末に比定される刻目突帯文土器の包含層を検出した。本年度の調査面積は、H区が約600m²、L区が約4,800m²、M区が約50m²の合計約4,800m²である。

それぞれの年度ごとの調査概要は、『稙田市遺跡―七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査概報―』I～V（大分県教育委員会　1988～1991年）としてすでに刊行している[1]が、本書をもって正式報告書とするものである。なお、概報で使用した遺構番号は調査が長期化するに伴い煩雑化し、遺構名称・地区名称等に不統一の部分が生じてきた。従って、本書では概報時の遺構名称を訂正して、Tab. 8・9（125・126頁参照）のように遺構名称を命名する。また、概報と本書での記述・見解等が異なる場合は、本書で記した内容を正式見解とする。

さらに近年、稙田市遺跡の周辺では七瀬川河川改修工事に伴う調査のほかにも、種々の開発行為に先立つ発掘調査が行なわれている。本項目の最後に、これらの発掘調査[2]について概観しておきたい（Fig. 2参照）。

1990年10月3日に、大分市教育委員会が河川改修工事区の北東側に隣接する地区を対象として試掘調査を行なっている。本調査地区はパン製造業者の工場移転に伴うもので、対象面積は約2,000m²である。調査は任意で設定した数本のトレンチを小型重機を用いて遺構検出面までの掘り下げを行なう方法を取った。その結果、調査区南

側ではすでに河床礫層が現われており、北側でも遺構検出面である茶褐色粘質土層が分布するものの、水田暗渠かと考えられる近代遺構の溝状遺構１条を検出したに留まり、有望な遺構・遺物は分布しないと判断した。

河川改修工事区の北側約80mの地点では国道210号線バイパスの建設が計画されており、これに先立つ発掘調査・試掘調査が、大分県教育委員会によって1990年度から1993年度にかけて行なわれている。国道210号線バイパス調査区でも、弥生時代終末から近世にいたる住居跡・土坑・溝・掘立柱建物等の様々な遺構が検出されている。これらの中には、河川改修工事調査区の遺構の延長部と推定されるものや密接な関連が想定されるものなども存在する。当該調査地点は、1996年度に報告書の刊行が予定されている。

以上のように、これからも稙田市遺跡周辺で様々な開発が行なわれるものと推定されるが、この地区の遺構・遺物の分布が濃密であることが判明しており、今後の開発行為に対しても文化財サイドからの慎重な対処が必要である。

註 (1) 稙田市遺跡については、調査概報以外でも下記の文献で調査概要や一部の遺物についての紹介を行なっている。
吉田寛「大分市稙田市遺跡の調査概要」(『大分県考古学会報』 3 1987年)
吉田寛「大分市稙田市遺跡出土の縄文晩期土器」(『古代』第95号 1993年)
(2) 調査担当者の坪根伸也氏（大分市教育委員会）、小柳和宏氏・綿貫俊一氏（大分県教育庁文化課）の御教示による。

⑵ 縄文時代の遺構・遺物

縄文時代に比定される遺構は、次のとおりである。(Fig. 6)

ＳＸ１　埋甕遺構

ＳＬ１　縄文時代晩期の土器包含層

上記の遺構は、すべて縄文時代晩期末の刻目突帯文土器単純期のものである。以下、その詳細を紹介する。

ＳＸ１（Fig. 7）　88年度調査区（Ａ区）の北側に位置する埋甕遺構である。周辺には縄文晩期土器の包含層が存在しており、多数の土器片が分布している。埋甕遺構は、平面形態円形の土坑掘方内に深鉢形土器を正位で埋置していた。土坑掘方は、内部に埋置する深鉢のサイズよりひとまわり大きい径42cm、深さ31cmを測る。後世の削平で上面を大きくカットされており、内部の深鉢形土器は胴部の屈曲部以下と口縁の一部を残存するのみであったが、周辺から出土した破片が接合し、最終的には口径復元が可能となった。また、底部は意図的に破砕されていた。埋甕の機能としては、死亡乳幼児の埋葬や胎盤収納などの説が提起されており、本例もそうした用途に用いられたものであろう。

出土遺物　Fig. 8は埋甕に使用された深鉢である。口縁端部よりやや下った位置に１条の刻目突帯を有する。復元口径は35.8cm、底部は意図的に破砕されており、現存高は35cm前後である。器壁の内外面には、二枚貝による条痕を横ないし斜め方向に施す。突帯上の刻目は指（爪）によって施されている。

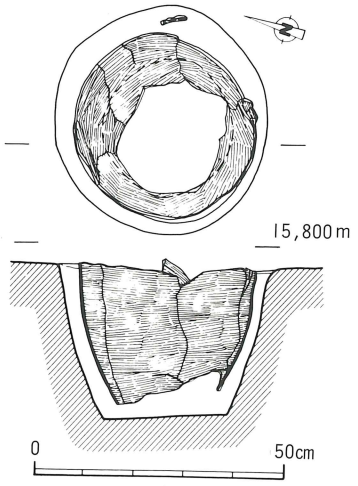


Fig. 7　埋甕遺構SX１

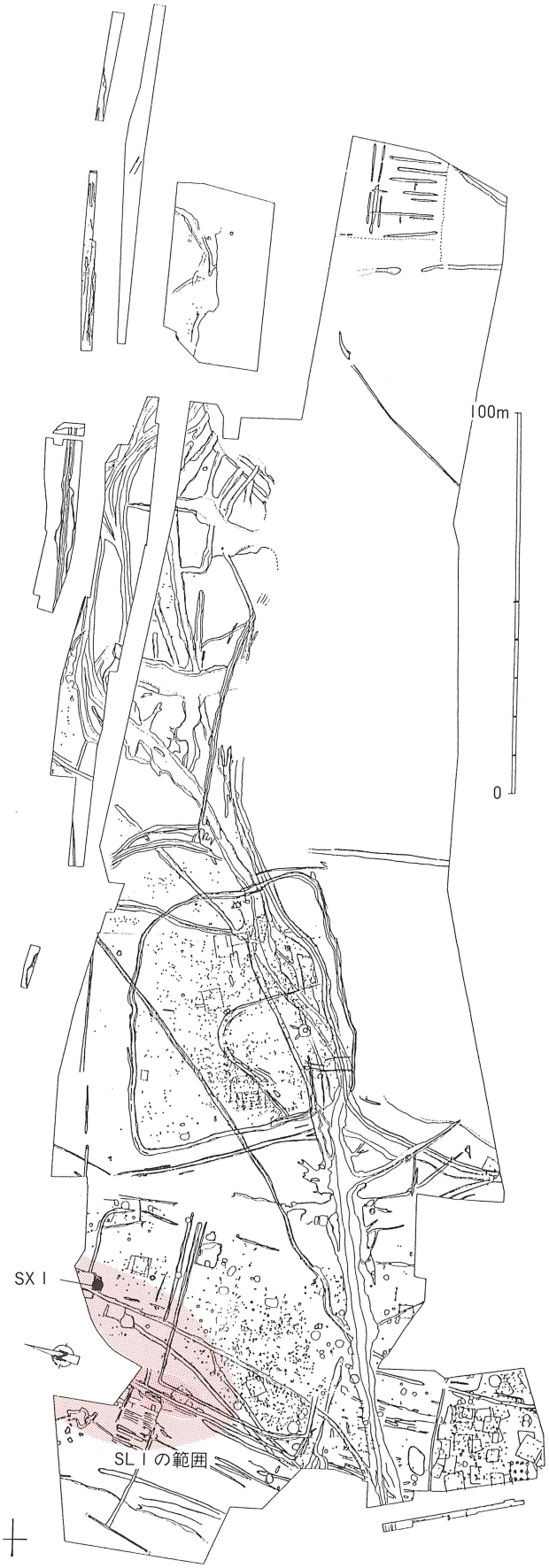


Fig. 6　縄文時代の遺構

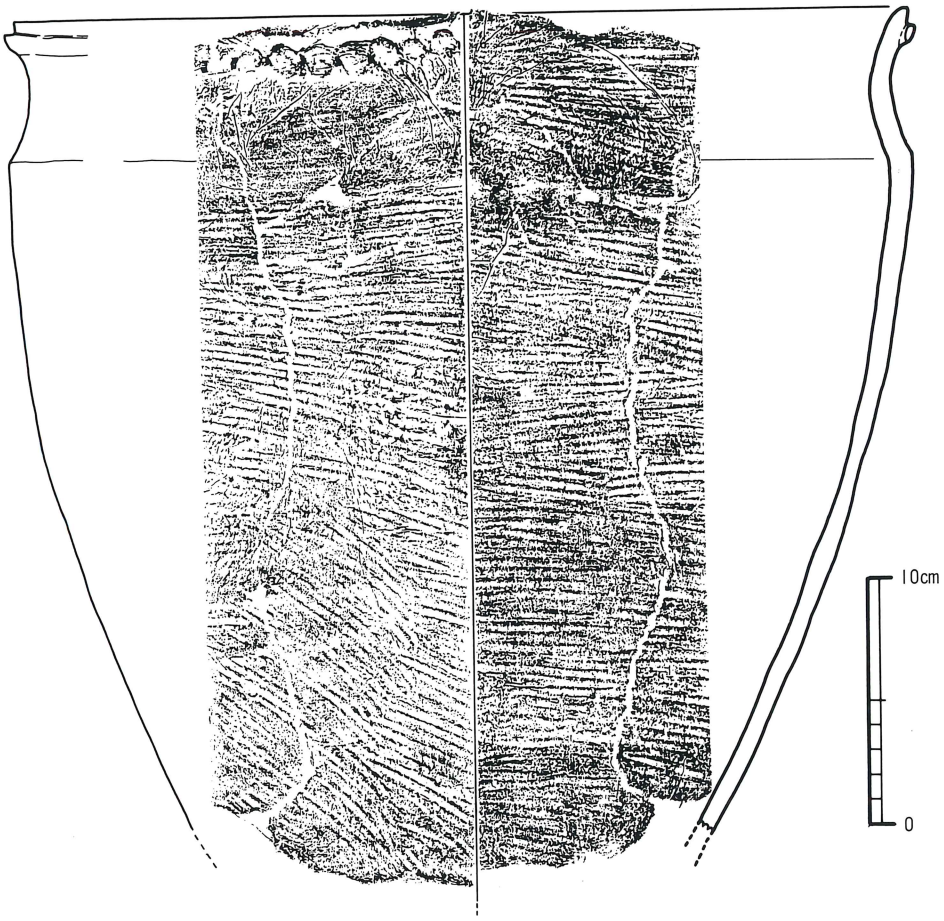
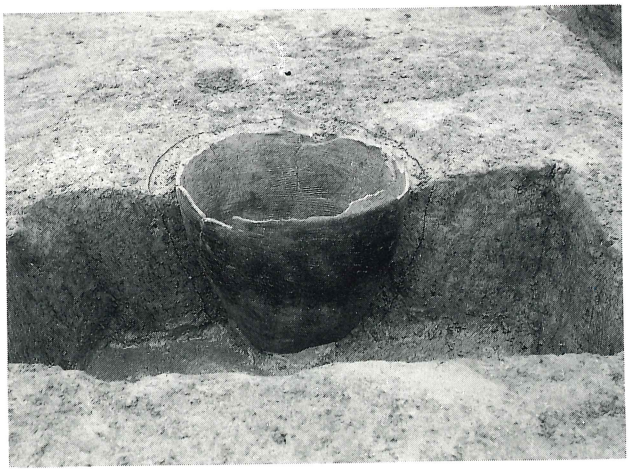


Fig. 8　埋甕実測（S＝⅓）

ＳＬ１　縄文時代晩期の土器包含層をＳＬ１とした。包含される土器片の大多数は、刻目突帯文土器単純期に位置づけられるものである。当該時期の土器片は、疎密の差はあれ、調査区全域で検出できるが、特に88年度・91年度調査区（Ａ区・Ｌ区）の北側では、大型破片を含む比較的濃密な分布が認められた。包含層中には土器・石器類を含み、この中で特筆されるものとしては丹塗り磨研の大型壺があげられる。当該包含層の出土資料は、現段階において東九州地方の刻目突帯文土器単純期の標式資料のひとつとして、検討の俎上に掲げられるべきものであると考える。

出土遺物（Fig. 9～13）　Fig. 9－1～Fig.10－49は深鉢である。深鉢は内外面に二枚貝による条痕調整が認められるが、ものによっては最終段階にナデ仕上げを施すものもみられる。この中で、1～29は口縁端部よりやや下った位置に1条の刻目突帯を有する深鉢である。刻目はすべて指（爪）によって施されている。30～40は突帯上の刻目が、指以外の工具によってなされる深鉢である。刻目を施す工具の原体は、ここに掲げた資料では不明なものが多い。ただ、30には刻目の内部に木目状の条線が認められる部位があり、工具の原体が木口を持つ木製工具であったことを示している。指以外の工具によって刻



埋甕出土状況

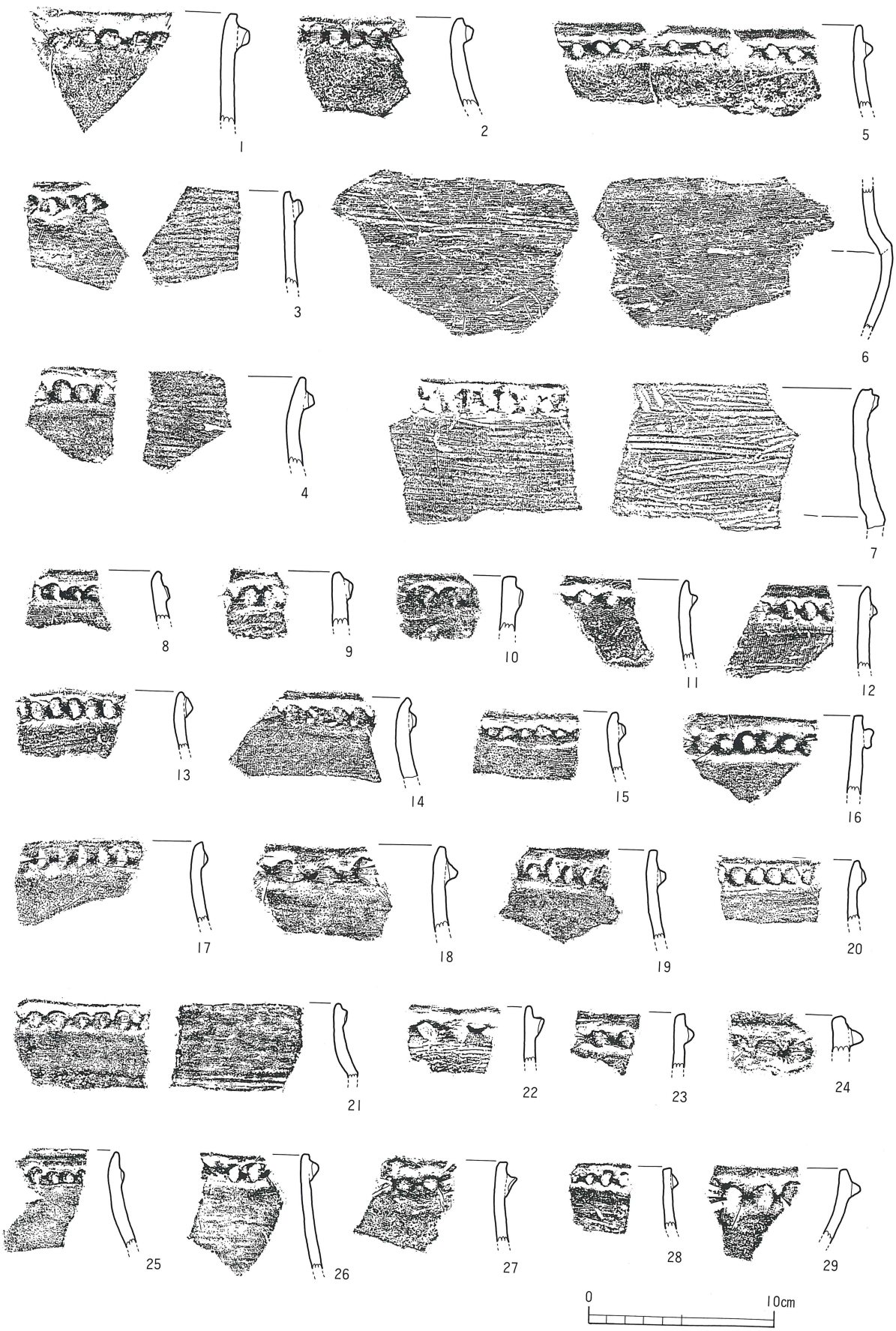


Fig. 9　SL 1 出土土器①（S＝⅓）

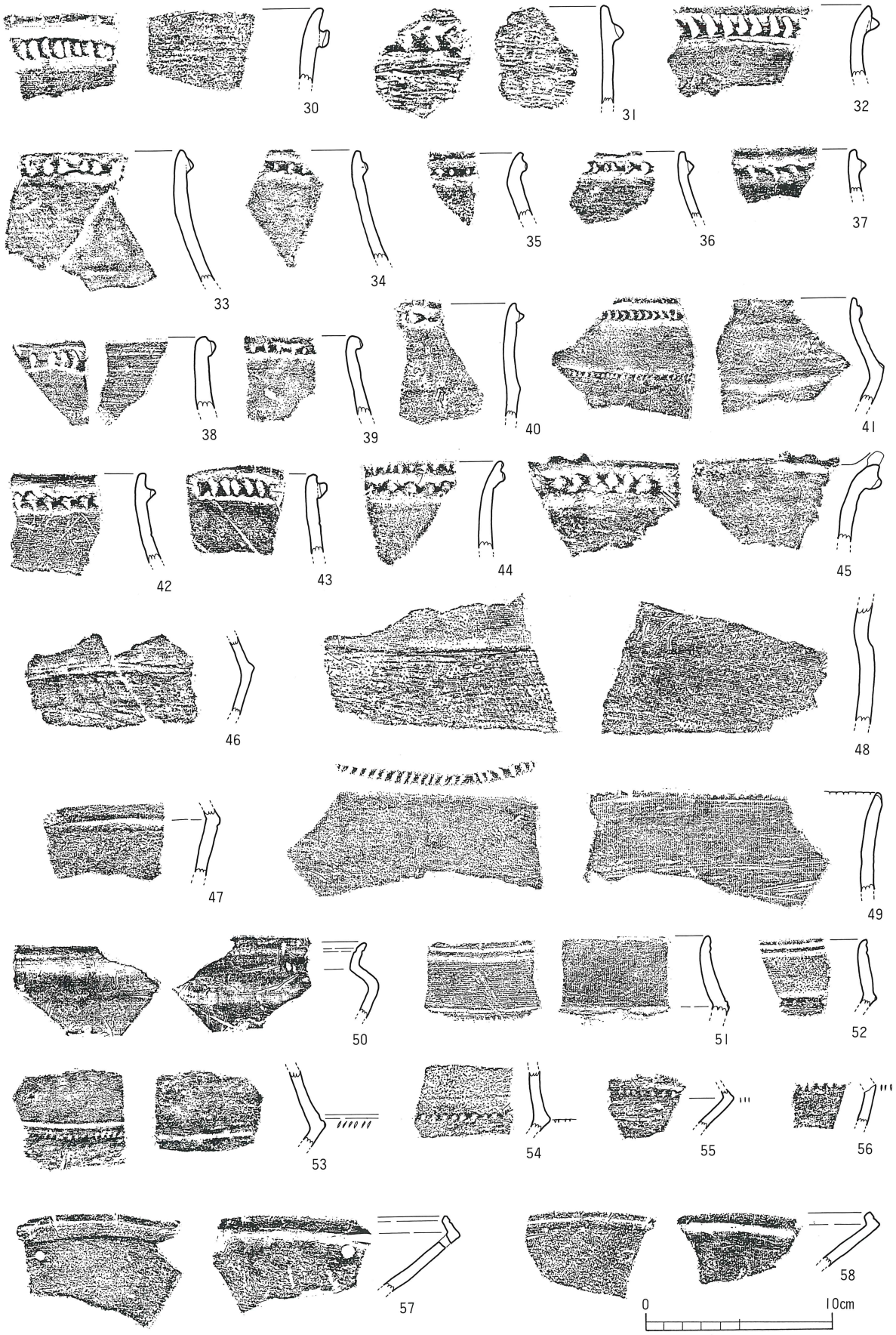


Fig. 10　SL 1 出土土器②（S＝⅓）

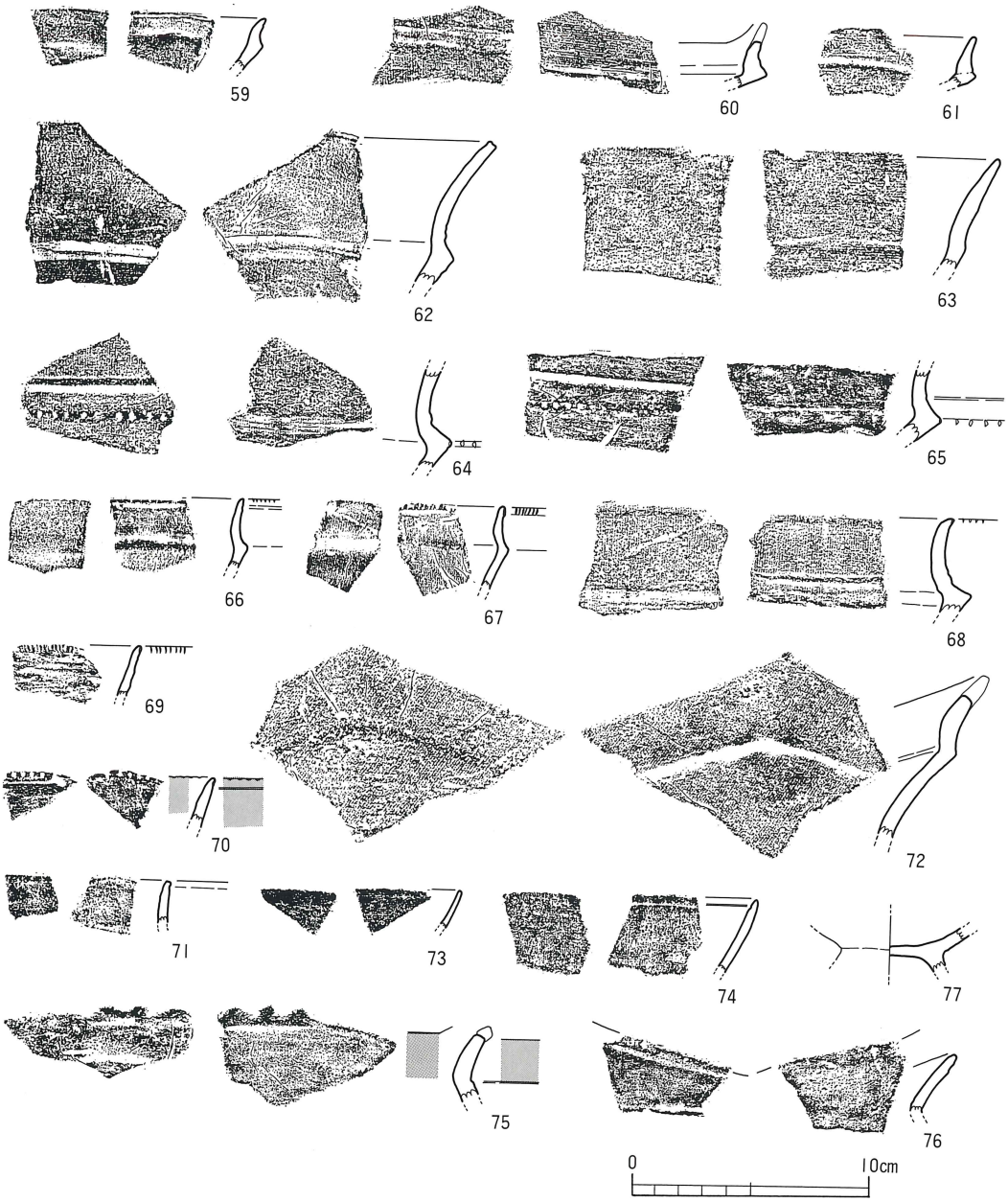


Fig. 11　SL 1 出土土器③（S＝⅓）

目がなされる深鉢には、突帯が口縁端部からやや下った部位に位置するもの（30～32・34～37・40）と口縁端部にほぼ接する部位に位置するもの（33・38・39）の両方が認められる。41は口縁端部よりやや下った位置に１条の刻目突帯、胴部屈曲部に直接刻みを有するものである。刻目突帯を有することから、ここでは一応深鉢のカテゴリーに含めたが、器高が浅く、浅鉢に復元される可能性も考えておきたい。42・43は刻目突帯と胴部屈曲部との間にヘラ状施文具による山形文あるいは平行線文を有するもの、44は口縁端部に直接刻み、口縁端部よりやや下った位置に１条の刻目突帯を有する深鉢である。42～44の深鉢にみられる特徴は、瀬戸内地域の刻目突帯文土器にみられる属性と共通する。45は口縁端部にヒレ状突起を有するものである。46～48は深鉢の胴部の屈曲部である。49は口縁上端部に刻目を有する深鉢で、上記の刻目突帯文の深鉢より型式学的に先行する特徴を持つものものである。ただし今回の調査では、当該資料と刻目突帯文土器とを層位的に分離できていない。

50～58・Fig.11－59～76は浅鉢である。以下の８類に分類する。浅鉢Ｉ類（50）は、退化した鍵形口縁を有す

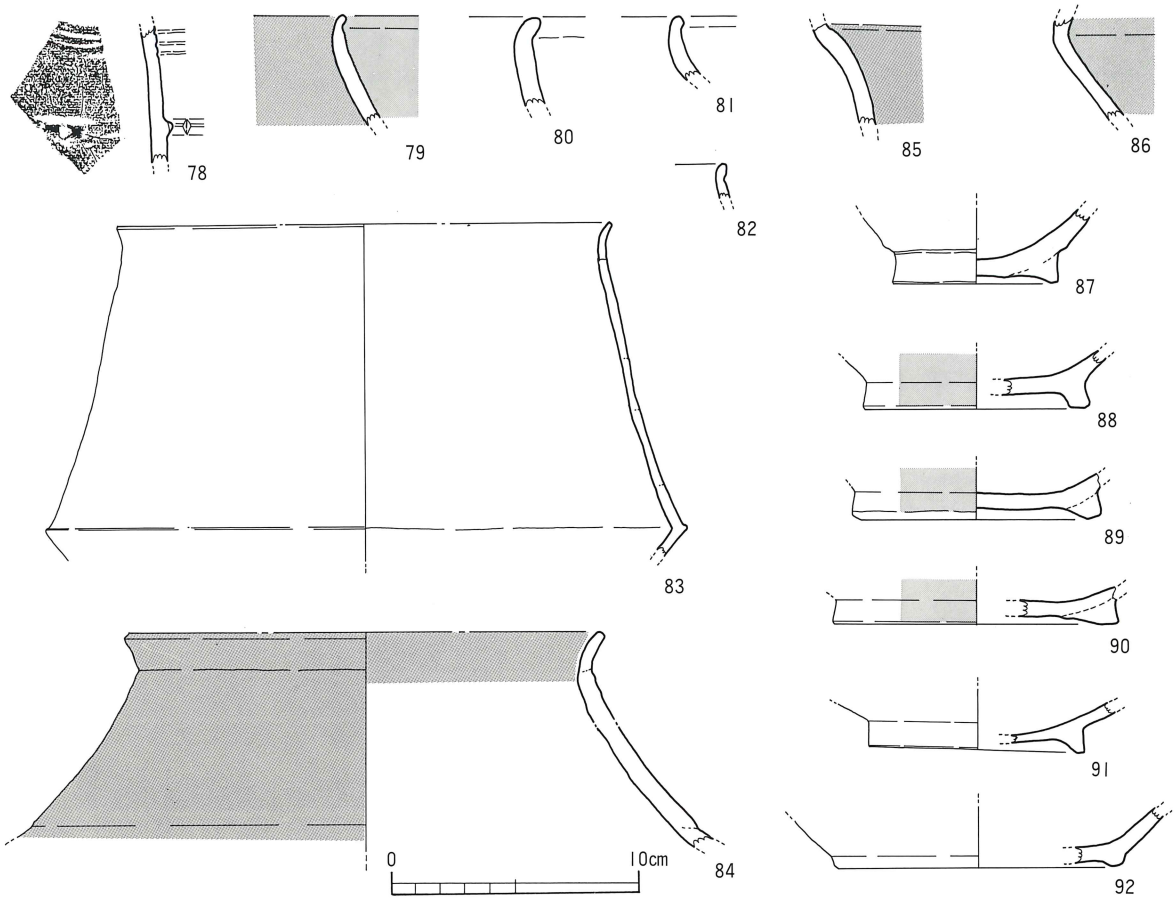


Fig. 12　SL 1 出土土器④（S＝⅓）

るものである。鍵形口縁を有する浅鉢は、刻目突帯文土器に先行する時期の黒川式期に特徴的なものであるが、本資料は黒川式期のものと比較して、口縁端部の形態が非常に退化していることが特徴である。浅鉢II類(51～53)はやや長めに立ち上がる「く」の字状口縁を有するもので、口縁端部外面には２条、胴部屈曲部には１条の浅い沈線を施す。また、胴部屈曲部の沈線下に直接刻みを有する場合もある。54～56は小片のため分類の所属が不明であるが、器形の特徴と胴部屈曲部の直接刻みの存在から、ここでは一応浅鉢II類に含めて考えておきたい。浅鉢III類（57～61）は、短く立ち上がる「く」の字状口縁を有するものである。57には補修孔と思われる穿孔が認められる。また59には口縁端部外面に細い沈線を施し、60にはヒレ状突起を有する。浅鉢IV類（62～65）は胴部に屈曲部を持ち、口縁部が大きく開く形態を呈するものである。胴部屈曲部に直接刻みを施すもの（64・65）も存在する。浅鉢V類（66～71）もやはり「く」の字状口縁を呈するものであるが、口縁の立ち上がりが浅鉢III類に比してやや長いものである。口縁端部外面に細かい直接刻みや、細く浅い沈線などを有するものもある。浅鉢VI類（72）は、いわゆる方形浅鉢と呼称される形態を呈するもの。浅鉢VII類（73・74）は、ボール状の器形を呈すると思われるもの。口縁内面端部近くに浅い沈線を有するもの(74)もある。そのほか浅鉢には、頸部から「く」の字状に屈曲する口縁部にヒレ状突起を有し、外面に赤色顔料を塗布するもの（75）や同様の形態で、波状口縁を呈し、口縁外面に浅い沈線を施すもの（76）などがあるが、出土例がそれぞれ１点に留まっており、今回は分類コードを付していない。

77は台付き鉢と思われるが、小片のため不明である。78も器種不明の小破片である。残存部の外面上部に２条以上の浅い沈線、下部に１条の刻目突帯を有する。

79～84は壺である。このうち79～82は小型壺の口縁部で、特に79には丹塗り磨研が施されている。83は胴部下位に屈曲部を持ち、外反する口縁部を持つもので、底部の形態は欠損のため不明である。やや特殊な器形である

	器　種	調整・施文		備考
Fig. 9-1	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
2	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
3	深鉢	条痕	刻目突帯(指刻み)	
4	深鉢	条痕	刻目突帯(指刻み)	
5	深鉢	条痕のちナデ	刻目突帯(指刻み)	同一
6	深鉢	条痕		個体
7	深鉢	条痕	刻目突帯(指刻み)	
8	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
9	深鉢	条痕	刻目突帯(指刻み)	
10	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
11	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
12	深鉢	条痕のちナデ	刻目突帯(指刻み)	
13	深鉢	条痕のちナデ	刻目突帯(指刻み)	
14	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
15	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
16	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
17	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
18	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
19	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
20	深鉢	条痕	刻目突帯(指刻み)	
21	深鉢	条痕	刻目突帯(指刻み)	
22	深鉢	条痕	刻目突帯(指刻み)	
23	深鉢	条痕	刻目突帯(指刻み)	
24	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
25	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
26	深鉢	条痕のちナデ	刻目突帯(指刻み)	
27	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
28	深鉢	条痕のちナデ	刻目突帯(指刻み)	
29	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
Fig. 10-30	深鉢	条痕	刻目突帯(木製工具)	
31	深鉢	条痕	刻目突帯(工具)	
32	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
33	深鉢	条痕	刻目突帯(工具)	
34	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
35	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
36	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
37	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
38	深鉢	条痕	刻目突帯(工具)	
39	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
40	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
41	深鉢	ナデ	刻目突帯	
			胴部直接刻み(工具)	
42	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
			山形沈線文	
43	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
			平行沈線文	
44	深鉢	ナデ	口縁端部直接刻み	
			刻目突帯(工具)	
45	深鉢	ナデ	刻目突帯(工具)	
			ヒレ状突起	

	器　種	調整・施文		備考
Fig. 10-46	深鉢	条痕		
47	深鉢	ナデ		
48	深鉢	条痕		
49	深鉢	条痕	口縁端部直接刻み	
50	浅鉢Ⅰ類	ナデ		
51	浅鉢Ⅱ類	ナデ		
52	浅鉢Ⅱ類	ナデ		
53	浅鉢Ⅱ類	ナデ		
54	浅鉢Ⅱ類	ナデ		
55	浅鉢Ⅱ類	ナデ		
56	浅鉢Ⅱ類	ナデ		
57	浅鉢Ⅲ類	条痕のちナデ	補修用の穿孔あり	
58	浅鉢Ⅲ類	ナデ		
Fig. 11-59	浅鉢Ⅲ類	ナデ		
60	浅鉢Ⅲ類	ナデ	ヒレ状突起	
61	浅鉢Ⅲ類	ナデ		
62	浅鉢Ⅳ類	ナデ		
63	浅鉢Ⅳ類	ナデ		
64	浅鉢Ⅳ類	ナデ		
65	浅鉢Ⅳ類	ナデ		
66	浅鉢Ⅴ類	ナデ		
67	浅鉢Ⅴ類	ナデ		
68	浅鉢Ⅴ類	ナデ		
69	浅鉢Ⅴ類	ナデ		
70	浅鉢Ⅴ類	ナデ		
71	浅鉢Ⅴ類	ナデ		
72	浅鉢Ⅵ類	ナデ		
73	浅鉢Ⅶ類	ナデ		
74	浅鉢Ⅶ類	ナデ		
75	浅鉢	ナデ		
76	浅鉢	ナデ		
77	台付鉢	ナデ		
Fig. 12-78	不明	ナデ	沈線	
			刻目突帯（工具）	
79	壷	丹塗り磨研	赤彩	
80	壷	ナデ		
81	壷	ナデ		
82	壷	ナデ		
83	壷	ナデ		
84	壷	丹塗り磨研	赤彩	
85	壷	丹塗り磨研	赤彩	
86	壷	丹塗り磨研	赤彩	
87	底部	ナデ		
88	底部	丹塗り磨研	赤彩	
89	底部	丹塗り磨研	赤彩	
90	底部	丹塗り磨研	赤彩	
91	底部	ナデ		
92	底部	ナデ		

Tab. 1　ＳＬ１出土縄文土器観察表

が、胎土の状況や薄い器壁を有することなどから、壺のバリエーションと考えておきたい。丹塗り磨研は施されていない。84は丹塗り磨研の大型壺で、外面と口縁内面に赤彩を施している。85・86は壺の肩部の破片で、外面に丹塗り磨研が認められる。

87～92は底部である。その形態のみでは深鉢の底部か、壺の底部かの判断をしがたいものもあるが、87は深鉢の底部である可能性が高く、また88～90は外面に丹塗り磨研が認められることから、壺の底部であることが確実であると思われる。

Fig.13は、包含層中から出土した石器資料である。1～13は石鏃で、このうち1～4は姫島産黒耀石、5～12はサヌカイトを素材として使用している。またサヌカイト製の石鏃のなかで、9・12のように平面形態が五角形を呈するものは、縄文時代晩期に特徴的なものであるという指摘がある。13は姫島産黒耀石を使用した石錐である。14は流紋岩を使用したノミ状石器で、唯一の磨製石器である。15はサヌカイトを使用した石匙である。

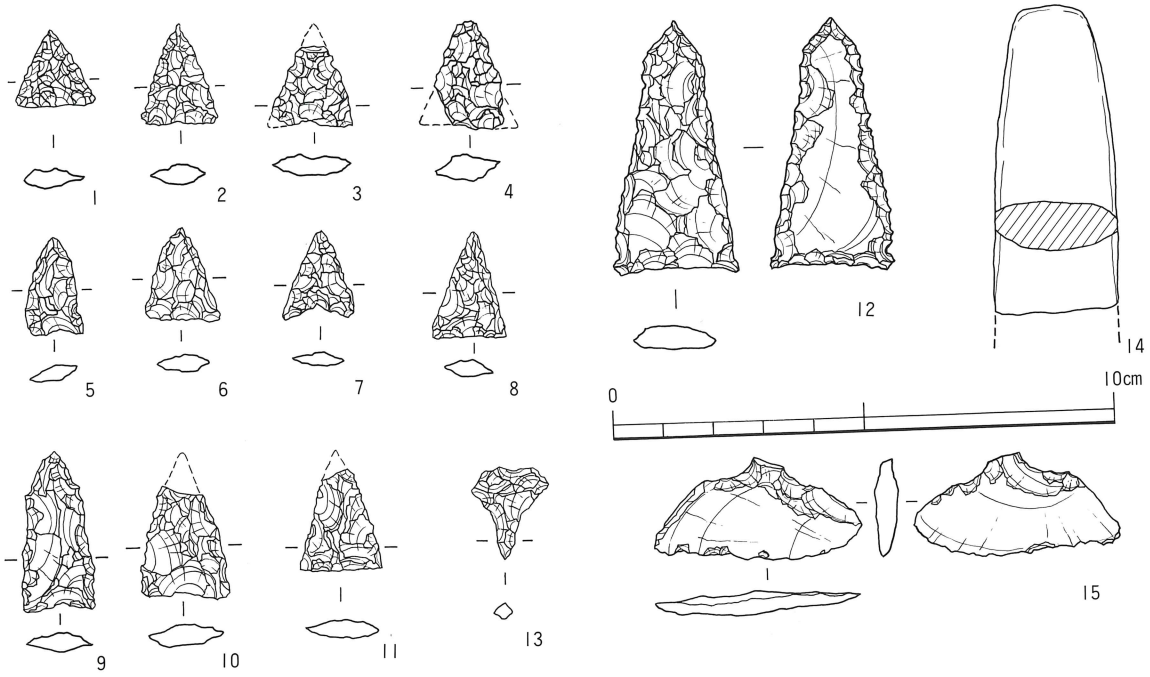


Fig. 13　SL 1 出土土器③（S＝⅔）

	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石　材
1	石鏃	1.9	1.5	0.4	0.7	姫島 ob
2	石鏃	1.5	1.6	0.3	0.5	姫島 ob
3	石鏃	1.6	1.6	0.4	0.6	姫島 ob
4	石鏃	2.1	1.3	0.5	1.0	姫島 ob
5	石鏃	1.8	1.2	0.3	0.6	サヌカイト
6	石鏃	1.7	1.5	0.3	0.6	サヌカイト
7	石鏃	1.4	1.4	0.3	0.5	サヌカイト
8	石鏃	2.1	1.4	0.3	0.6	サヌカイト

	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石　材
9	石鏃	3.0	1.4	0.4	1.6	サヌカイト
10	石鏃	2.1	1.7	0.4	1.3	サヌカイト
11	石鏃	2.0	1.6	0.3	0.8	サヌカイト
12	石鏃	4.8	1.6	0.4	4.2	サヌカイト
13	石錐	1.6	1.3	0.5	0.7	姫島 ob
14	ノミ状石器	5.9	2.5	0.9	15.4	流紋岩
15	石匙	2.0	3.0	0.5	0.8	サヌカイト

Tab. 2　ＳＬ１出土石器観察表

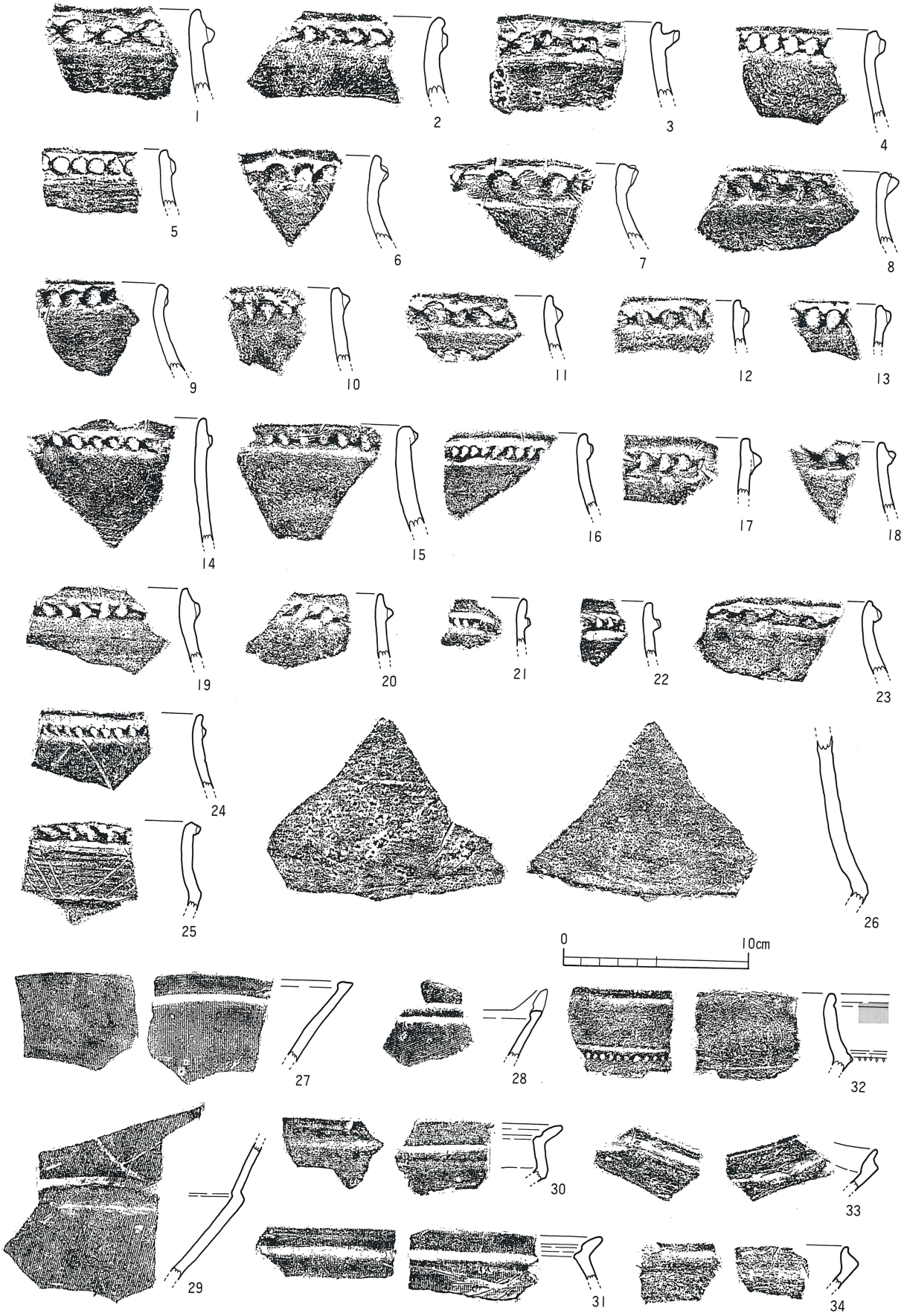


Fig. 14　他遺構に混入した縄文時代遺物①（S＝⅓）

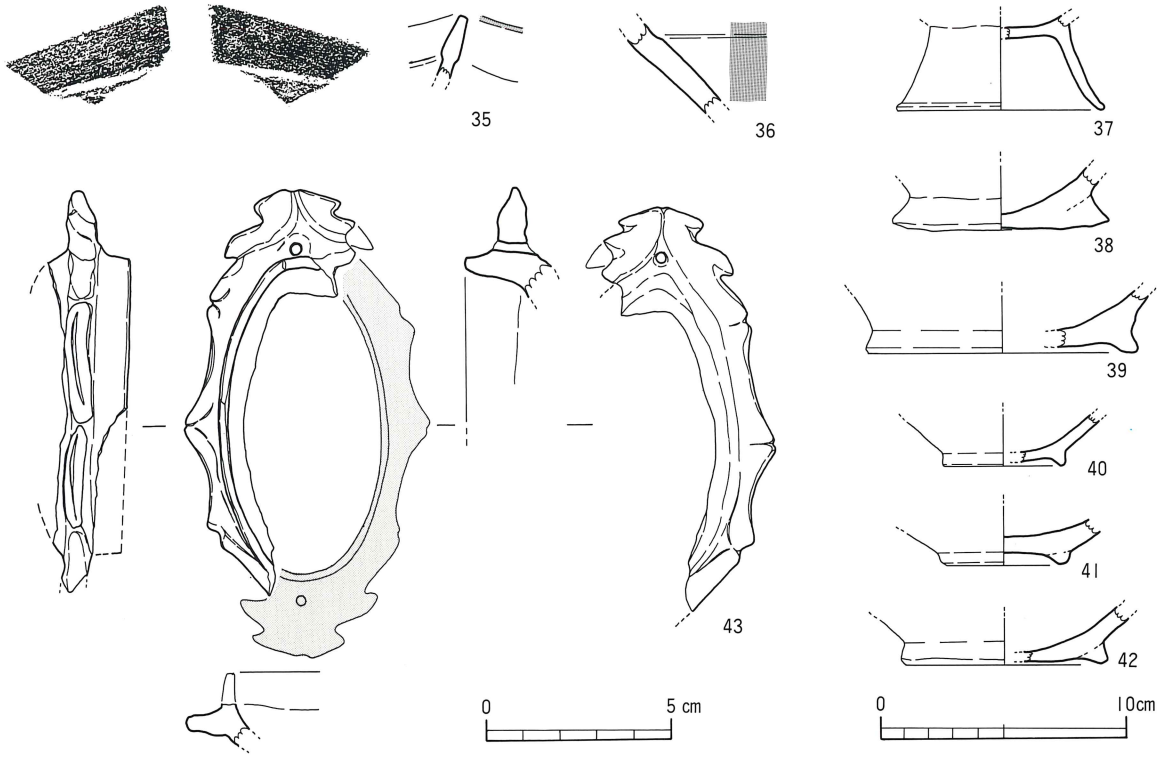


Fig. 15　他遺構に混入した縄文時代遺物②
(35～42はＳ＝⅓、43はＳ＝½)

他遺構に混入した縄文時代遺物（Fig.14～16）　以下に紹介する縄文時代晩期の遺物は、本遺跡の弥生時代以降の遺構に混入した状態で発見されたものである。土器類には刻目突帯文に先行するものが若干含まれているものの、その大半が包含層ＳＬ１の出土資料と同時期のものである。縄文土器が混入した遺構は、包含層が存在した地点を切って構築されたものが大半であり、これらの混入資料のほとんどは本来的にはＳＬ１に包含されていたと解釈してさしつかえないと考える。

Fig.14―１～26は刻目突帯文の深鉢形土器である。このうち１～13は指（爪）刻みによる突帯、14～25は指以外の工具による刻目突帯を有するものである。27～Fig.15―35は浅鉢である。このうち27～31は鍵状口縁を有する浅鉢であり、刻目突帯文土器より先行する時期に位置づけられる可能性が高い。32～35は刻目突帯文土器とセットになる浅鉢で、32は浅鉢Ⅱ類、33・34は浅鉢Ⅲ類、35は浅鉢Ⅵ類（方形浅鉢）に分類したものである。36は丹塗り磨研壺の肩部の破片、37は台付鉢の可能性が考えられる。38～42は底部で、このうち38は深鉢、40は小型壺の底部であることが確実だと思われる。43は特殊な形態を有する鉢形土器で、当該時期の九州地域の土器からはその系譜をたどりえないものである。口縁部下の波状の張り出しは、東日本地域で大洞Ｃ２式後半段階に盛行する「メガネ状突帯」といわれるものと類似している。大洞Ｃ２式に類似する東日本系の土器と考えたいが、このような器形そのものは亀ケ岡文化圏の土器にも類例がない。胎土は先に記述した刻目突帯文土器の一部のものと特に変わったところはなく、現状では赤色顔料が塗布された痕跡も認められない。当該資料の系譜や詳細な時期に関しては、今後の課題としておきたい。

Fig.16―１～24は、他遺構から出土した石器資料である。１～22は石鏃で、このうち１～５は姫島産黒耀石、６～22はサヌカイトを素材として使用している。５は姫島産黒耀石を素材としているが、平面形態が五角形を呈する。23はサヌカイトを素材とした石匙、24はサヌカイトの石核である。

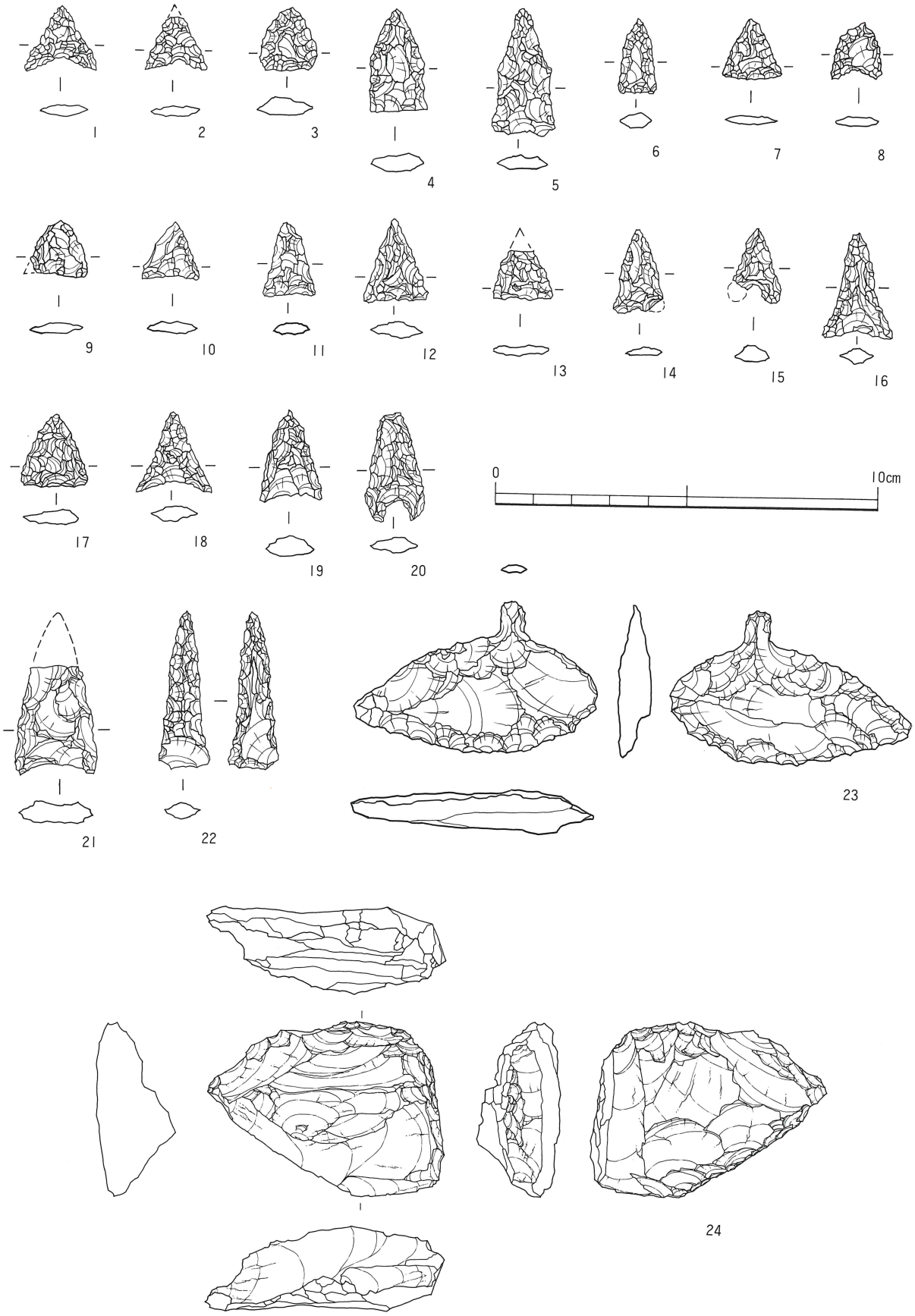


Fig. 16　他遺構に混入した縄文時代遺物③（S＝⅔）

	器　種	調整・施文		備考
Fig. 14-1	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
2	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
3	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
4	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
5	深鉢	条痕	刻目突帯(指刻み)	
6	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
7	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
8	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
9	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
10	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
11	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
12	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
13	深鉢	ナデ	刻目突帯(指刻み)	
14	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	
15	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	
16	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	
17	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	
18	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	
19	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	
20	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	
21	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	
22	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	
23	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具）	

	器　種	調整・施文		備考
Fig. 14-24	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具） 山形沈線文	
25	深鉢	ナデ	刻目突帯（工具） 平行沈線文	
26	深鉢	条痕のちナデ		
27	浅鉢	ナデ		
28	浅鉢	条痕のちナデ		
29	浅鉢	ナデ		
30	浅鉢	条痕		
31	浅鉢	条痕		
32	浅鉢II類	ナデ		
33	浅鉢III類	条痕		
34	浅鉢III類	ナデ		
Fig. 15-35	浅鉢VI類	ナデ		
36	壷	丹塗り磨研　赤彩		
37	台付鉢	ナデ		
38	底部	ナデ		
39	底部	ナデ		
40	底部	ナデ		
41	底部	ナデ		
42	底部	ナデ		
43	鉢	ナデ		

Tab. 3　他遺構出土縄文土器観察表

	器種(出土遺構)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石　材
1	石鏃(SH 1)	1.3	1.7	0.3	0.4	姫島 ob
2	石鏃(SR 1)	1.2	1.4	0.3	0.5	姫島 ob
3	石鏃(SH13)	1.6	1.5	0.5	0.9	姫島 ob
4	石鏃(SH 1)	2.6	1.5	0.4	1.5	姫島 ob
5	石鏃(SD 1)	3.2	1.6	0.4	1.6	姫島 ob
6	石鏃(C区柱穴)	1.9	1.0	0.4	0.6	サヌカイト
7	石鏃(A区表採)	1.6	1.6	0.2	0.4	サヌカイト
8	石鏃(SD 1)	1.4	1.3	0.3	0.5	サヌカイト
9	石鏃(SH 1)	1.4	1.4	0.3	0.5	サヌカイト
10	石鏃(SD 1)	2.2	1.5	0.5	1.4	サヌカイト
11	石鏃(SR 1)	1.8	1.4	0.3	0.5	サヌカイト
12	石鏃(SR 1)	2.0	1.7	0.4	0.8	サヌカイト

	器種(出土遺構)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石　材
13	石鏃(A区井戸)	1.3	1.5	0.3	0.5	サヌカイト
14	石鏃(SR 1)	2.0	1.0	0.2	0.5	サヌカイト
15	石鏃(I区)	1.5	1.2	0.4	0.6	サヌカイト
16	石鏃(L区)	2.4	1.8	0.4	1.1	サヌカイト
17	石鏃(表採)	1.7	1.7	0.3	0.6	サヌカイト
18	石鏃(SD 1)	1.8	1.7	0.4	0.7	サヌカイト
19	石鏃(表採)	2.2	1.5	0.5	0.7	サヌカイト
20	石鏃(SD 1)	2.7	1.6	0.4	1.3	サヌカイト
21	石鏃(SD 1)	2.6	2.1	0.6	3.9	サヌカイト
22	石鏃(SD16)	4.0	1.4	0.4	1.6	サヌカイト
23	石匙(SR 1)	3.9	6.1	1.1	16.9	サヌカイト
24	石核(SD16)	5.9	4.5	2.2	56.4	サヌカイト

Tab. 4　他遺構出土石器観察表（Fig. 16に対応）

小結―稙田市遺跡における縄文時代晩期土器の位置づけ―　大分県下の刻目突帯文土器は、1980年に発表された高橋徹の論考[1]によって、「下黒野式」の名称が与えられた。下黒野式は刻目突帯文土器単純期としての位置づけがなされており、論考発表当初はその位置づけをめぐって多少の異論があったものの、近年ではその後の資料増加によって、その編年的位置を確定しつつある。稙田市遺跡出土の縄文時代晩期土器も刻目突帯文土器を主体とするものであり、それらは下黒野式の内容を補強・検証するものである可能性がある。稙田市遺跡の縄文時代晩期土器の中で主体となるものは、刻目突帯を有する深鉢、くの字状口縁の浅鉢および壺形土器である。上記の深鉢・浅鉢・壺の三者はセットとして認識されるもので、これらは「下黒野式」の内容と矛盾するものではない。そのほか、下黒野式に先行すると思われる形態の深鉢や鍵形口縁浅鉢などが若干残存するが、それらは少数に留まる。

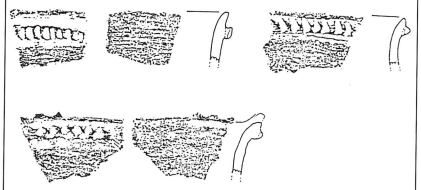
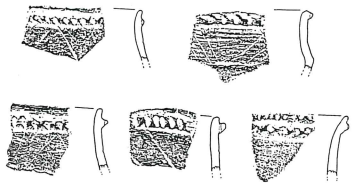
深鉢・浅鉢・壺の構成比は、Tab. 5の通りとなる。本表は残存口縁部数によるカウントを行ったもので、深鉢が6割を越え、浅鉢は3割弱、壺は1割に満たない数値で構成される。このような結果は縄文時代土器の構成比と類似しており、弥生時代的な属性を示す壺形土器の個体数はいまだ少数に留まることが指摘される。

出土土器の構成比の6割強を占める深鉢について、分類を行ったものがTab. 6である。深鉢は1例を除き、すべてが刻目突帯文を有するもので、無刻目突帯文の深鉢は出土していない。刻目突帯文をもつ深鉢には、突帯が口縁端部からやや下った部位に位置するものと口縁端部にほぼ接する部位に位置するものの両方が認められるが前者が多い傾向にある。刻目は指（爪）によるものが6割を越え、3割弱がそれ以外の工具によるものである。指（爪）刻みによる刻目突帯文土器は、当該土器群の中でも比較的古い時期に多いという指摘があり、稙田市遺跡の縄文時代晩期土器も大まかな傾向としては一致をみるものである。そのほか、刻目突帯と胴部屈曲部との間に山形文や平行線文をもつものや刻目突帯とともに口縁端部に直接刻みを有するものなど、瀬戸内地域の刻目突帯文土器にみられる属性と共通する個体が少数みられる。これらの瀬戸内的な属性を有する土器の存在は、稙田市遺跡の地域的位相を物語るものとして注目される。

浅鉢について、分類を行ったものがTab. 7である。刻目突帯文土器に伴うと推定される浅鉢の形態を7類に分類した。分類番号を付していないもので、鍵形口縁を有するものは刻目突帯文土器に先行する無刻目突帯文土器（上菅生B式）とセットになるものと推定される。稙田市遺跡では無刻目突帯文の深鉢は出土し

深鉢	浅鉢	壺	その他	総計
76 (62.3%)	35 (28.7%)	9 (7.3%)	2 (1.6%)	122 (99.9%)

Tab. 5　縄文時代晩期土器の組成

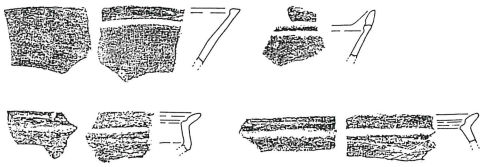
深鉢の特徴		SL1	混入	(総計)
刻目突帯文土器に先行する可能性があるもの		1	0	1 (1.3%)
指（爪）刻みによる刻目突帯文土器		31	17	48 (63.2%)
工具による刻目突帯文土器		12	10	22 (28.9%)
瀬戸内的な属性を有する刻目突帯文土器		3	2	5 (6.6%)
		47	29	76 (100%)

Tab. 6　深鉢の分類（土器はS＝1/6）

ていないので、これに伴うと推定される鍵形口縁浅鉢の出土も少数に留まっている。浅鉢の中で主体を占めるものはII～V類で、くの字状口縁を有するものが特徴的である。浅鉢II～V類は「下黒野式」の標式となっている下黒野遺跡（大分県狭間町）の出土資料とほぼ同一で、下黒野式に特徴的なものといえよう。

以上、稙田市遺跡における刻目突帯文土器の概要を紹介した。上記の土器資料は刻目突帯文を有する深鉢とくの字状口縁の浅鉢および壺形土器の組成となっており、「下黒野式」の内容を満たすものである。「下黒野式」に先行する「上菅生B式」については、無刻目突帯文の深鉢と鍵形口縁浅鉢がセットになるもので、現在までの資料では壺形土器の共伴は確認されていない。「上菅生B式」と「下黒野式」は、単に深鉢における突帯文の刻目の有無といった属性上の差異に留まるのみではなく、浅鉢においては鍵形口縁と「く」の字状口縁という形態上の差異をもち、さらに壺形土器についても存否の有無といった差異をもつ。従って、両者は「様式」としての差異を有するものと解釈され、考古学的な時間軸の上でも明確な前後関係に位置づけられるものである。「上菅生B式」に特徴的な鍵形口縁浅鉢は、九州地方全体に視点を拡大すれば、縄文時代晩期中葉の「黒川式」の時期に特徴的なものである。また、稙田市遺跡や下黒野遺跡でみられるような「下黒野式」に特徴的なくの字状口縁浅鉢は黒川式期には認められず、後続する刻目突帯文土器単純期に散見される。浅鉢の形態から検証すれば、「上菅生B式」と「下黒野式」の編年的な位置づけはさらに明確にされるように思える。

稙田市遺跡における縄文時代晩期土器については、量的にも質的にも十分な資料であるとは言い難い部分もあるが、本項目ではその土器の組成について分析上の数値を提示した形での検討が一応可能であった。これらの結果は他の遺跡でさらに検証してゆくことが必要であるが、現状では大分県下の刻目突帯文単純期の土器組成のスタンダードな様相を提示できている可能性が高いと思っている。この分析結果が、「下黒野式」の内容を補強・検証するものとなれば幸いである。

深鉢の特徴		SL1	混入	(総計)
刻目突帯文土器に先行する可能性が高いもの（鍵形口縁浅鉢）		0	4	4 (11.4%)
I類 鍵形口縁の退化形態		1	0	1 (2.9%)
II類 「く」の字状口縁浅鉢		6	1	7 (20.0%)
III類 「く」の字状口縁浅鉢		5	2	7 (20.2%)
IV類		4	0	4 (11.4%)
V類 「く」の字状口縁浅鉢		6	0	6 (17.1%)
VI類 方形浅鉢		1	1	2 (5.7%)
VII類 ボール状の器形		2	0	2 (5.7%)
その他		2	0	2 (5.7%)
		27	8	35 (99.9%)

Tab. 7 浅鉢の分類（土器はS＝1/6）

註 (1) 高橋徹「大分県考古学の諸問題(1)―刻目突帯文土器の出現とその展開について―」（『大分県地方史』第98号 1980年）

⑶　弥生時代～古墳時代前期の遺構・遺物

弥生時代から古墳時代前期に比定される遺構は、次のとおりである（Fig.17）。

ＳＬ２　弥生時代前期の土器包含層
ＳＤ１　弥生時代後期末から古墳時代前期の溝
ＳＤ２～10　ＳＤ１に付属あるいは接続する溝
ＳＤ11・ＳＤ12　弥生時代後期の溝

以下、時代順に遺構・出土遺物の詳細を紹介する。

ＳＬ２　90年度調査区（Ｆ区）の中央西側の一部に堆積する包含層である。この部分は沖積低地の縁辺部から落ちる谷状地形の凹地に相当する部位で、約10m四方の狭い範囲で、弥生時代から古墳時代の遺物が少量検出された（ＳＬ２出土の古墳時代遺物については、82頁参照）。弥生時代の遺物は前期に比定される土器のみである。

出土遺物（Fig.18－１～13）　１は壺の口縁部で、内外面に細かいミガキを施す。２は口縁部が小さくＬ字状に屈曲する甕で、端部外面に刻目を施す。３は如意状口縁の甕で、これも端部に刻目を有する。４～９はいわゆる下城式タイプの甕。４～６はわずかに屈曲しながら外反する口縁を呈し、口縁端部に直接刻み、端部よりやや下った位置に刻目突帯を有する。調整は外面にハケメあるいはナデ、内面にはハケメの後ナデを施す。７～９は口縁端部に刻目を施さず、内外面にナデ調整を行なっている。10～13は底部で、平底のものと上底を呈するものがある。１～13は比較的狭い範囲でまとまって検出されたもので、各個体の時期的な偏差も少ないと思われる。４～６の刻目突帯と口縁端部直接刻みを有する下城式の甕や７～９の内外面をナデ仕上げする下城式の甕、および口縁端部に刻目を有する２・３の甕や１の壺の口縁部など、いずれも弥生時代前期末まではくだらない特徴が看取される。従って、以上の資料を弥生時代前期後半の時間幅の中に位置づけたい。

ここで蛇足ではあるが、上記の資料と関連して、ほかにも古墳時代の遺構に混入した弥生時代前期の土器が若干存在するので紹介しておきたい（Fig.18－14～17）。14はＳＤ９に混入したもので、肥厚する口縁部を持ち、端部に刻みを施すもの。内外面にハケメ調整を行なっている。15～17はＳＤ５に混入した甕の口縁部である。15・16は口縁端部に接する部

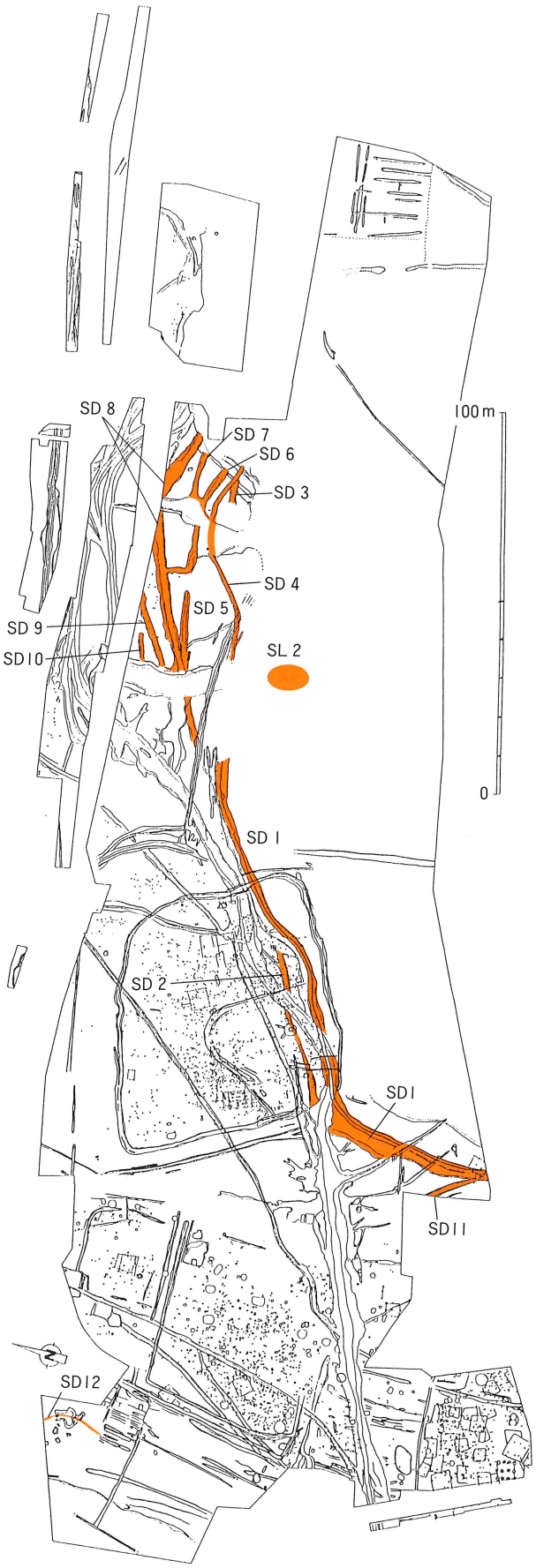


Fig. 17　弥生時代～古墳時代前期の遺構

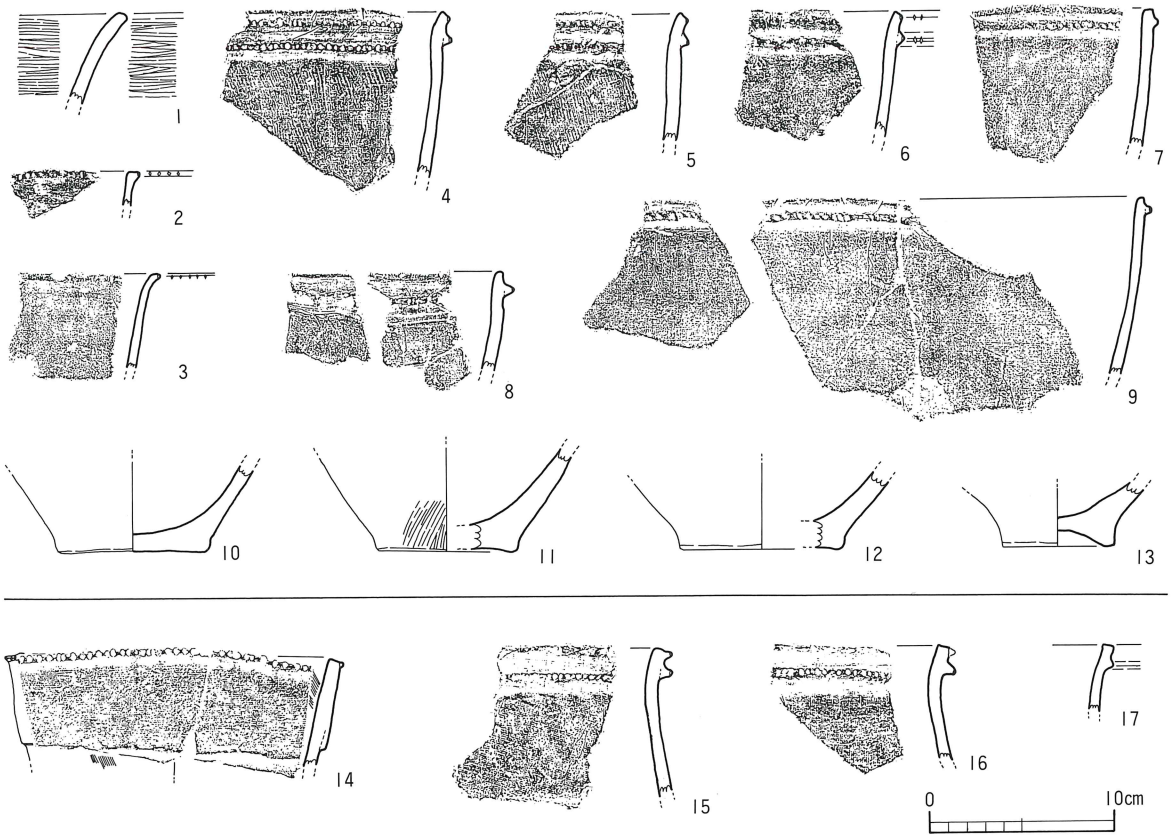


Fig. 18　SL 2 出土遺物と関連資料（S＝¼）
（1～13　SL 2　14　SD 9　15～17　SD 5）

位に２条の刻目突帯を有するもの。17は口縁端部に面を持ち、端部からやや下った部位に刻目のない突帯を有するものである。17の時期的な帰属は不詳であるが、14～16は弥生時代前期後半としたＳＬ１出土資料に先行する特徴を有する。特に型式学的な観点からは、15・16から４～６のような口縁部形態への変化を想定することも可能である。また14のような口縁形態を持つ甕は、弥生時代前期中頃の西瀬戸内地方にかけて盛行するものである。従って、14～16を弥生時代前期中頃前後に位置づけておきたい。

ＳＤ11　90年度に調査を行なったＥ区の西側に位置する弥生時代後期中頃に比定される溝で、東側はＳＤ１によって切られている。幅約1.5m、長さ15m、深さ約40cmを測る。

出土遺物（Fig.19―１・２）　１は壺で、短く立ち上がる複合口縁部の破片である。外面には櫛描波状文を施し、口縁端部上面には小さな円形貼り付け文を有する。口縁外面から端部にかけて、赤彩が認められる。２は平底を呈する底部である。１・２はいずれも弥生時代後期中葉の特徴を有する。

ＳＤ12　91年度調査区（Ｌ区）の北側に位置する弥生時代後

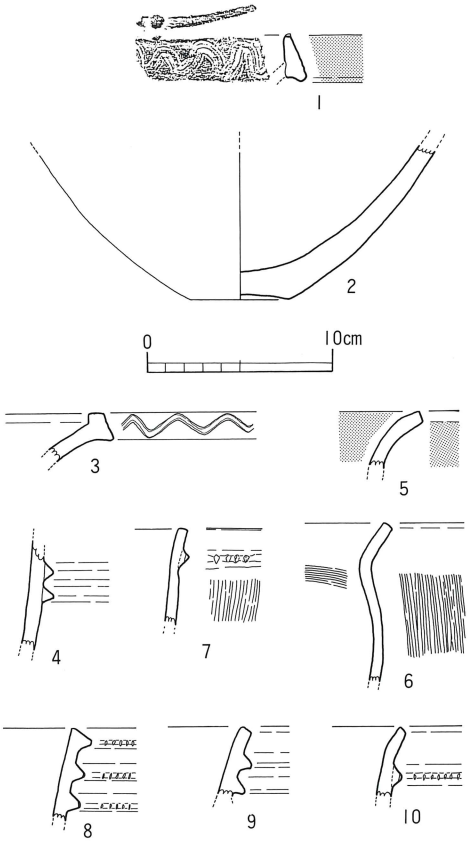


Fig. 19　SD11・SD12出土遺物（S＝¼）
（1・2　SD11　3～10　SD12）

期中頃に比定される溝である。攪乱を受けている部分もあるが、その規模は幅約0.4m、長さ17m、深さ約30cmを測る。付近には縄文時代晩期末の包含層が存在するため、埋土中には弥生土器のほかに刻目突帯文土器などが一定量混入していた。

出土遺物（Fig.19—3～10）　3は壺で、短く立ち上がる複合口縁部の外面に半截竹管による波状文を施している。内外面はナデ調整を行なう。4は壺の胴部破片で、2条以上の断面三角突帯を有する。これも内外面にナデを施す。5は内外面に赤彩を施す口縁部で、これも壺である可能性が高い。6は甕の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁内外面にナデ、胴部内外面にはハケメ調整を施す。7～10はいわゆる下城式タイプの甕の口縁部である。7・10が1条、8が3条以上の刻目突帯を有する。9の突帯は2条以上を数えるが、刻目を施していない。以上の出土遺物は、3～6が弥生時代後期中頃前後、7～10が前期末から中期に比定できる。7～10は混入品で、3～6が遺構の年代を示すものであろう。

ＳＤ１（Fig.20）　発掘調査区を斜めに横断する形で検出された大規模な溝である。87年度（Ｂ区）・89年度（Ｃ区）・90年度（Ｅ区）の各調査区で検出されており、みかけの規模は地点によって差があるが、平均して概ね幅4.5m、深さ1.6m前後を測る。89年度調査区（Ｃ区）で約90m、87年度調査区（Ｂ区）で約30m、90年度調査区（Ｅ区）で約23mが検出されており、総延長は約143mとなる。

90年度の調査区（Ｅ区）では、遺物の出土状況（31頁写真参照）と土層断面の詳細な検討から、溝の掘り直しが行なわれていることを確認した。Fig.21の下段に提示した土層図を参照されたい。ここでは最初に掘削した溝を「下層溝」、掘り直しを行なった後の溝を「上層溝」と仮称して、以下の記述を進めることとする。

上層溝は、土層断面からみると上面幅約4m、深さ約80cmを測る。ただし、東側の肩部は本来のものでなく、掘削や流水によって崩壊した可能性が高い。埋積土は、溝の機能時に堆積したと思われる砂質土（Fig.21下段　8・9層）と機能終了以後に堆積したと思われる土層群（同1～7）の大きく2層群に分けられる。上位の埋積土層中には地山の二次堆積である明茶褐色粘質土のブロックや焼土を含む部位があり、意図的な埋土である可能性を持つ部分も認められる。出土遺物の垂直分布を検討してみると（Fig.22）、標高15.30m前後を主体とする上位の一群と標高15.00m前後を主体とする下位の一群が存在することが見て取れる。上位遺物群は2～5層、下位遺物群は8層上面を中心に分布しており、遺物の群と土層の関係もほぼ対応する。上位遺物群（Fig.28～31）は、布留式段階に比定される完形品を含んだ良好な資料で構成されている。下

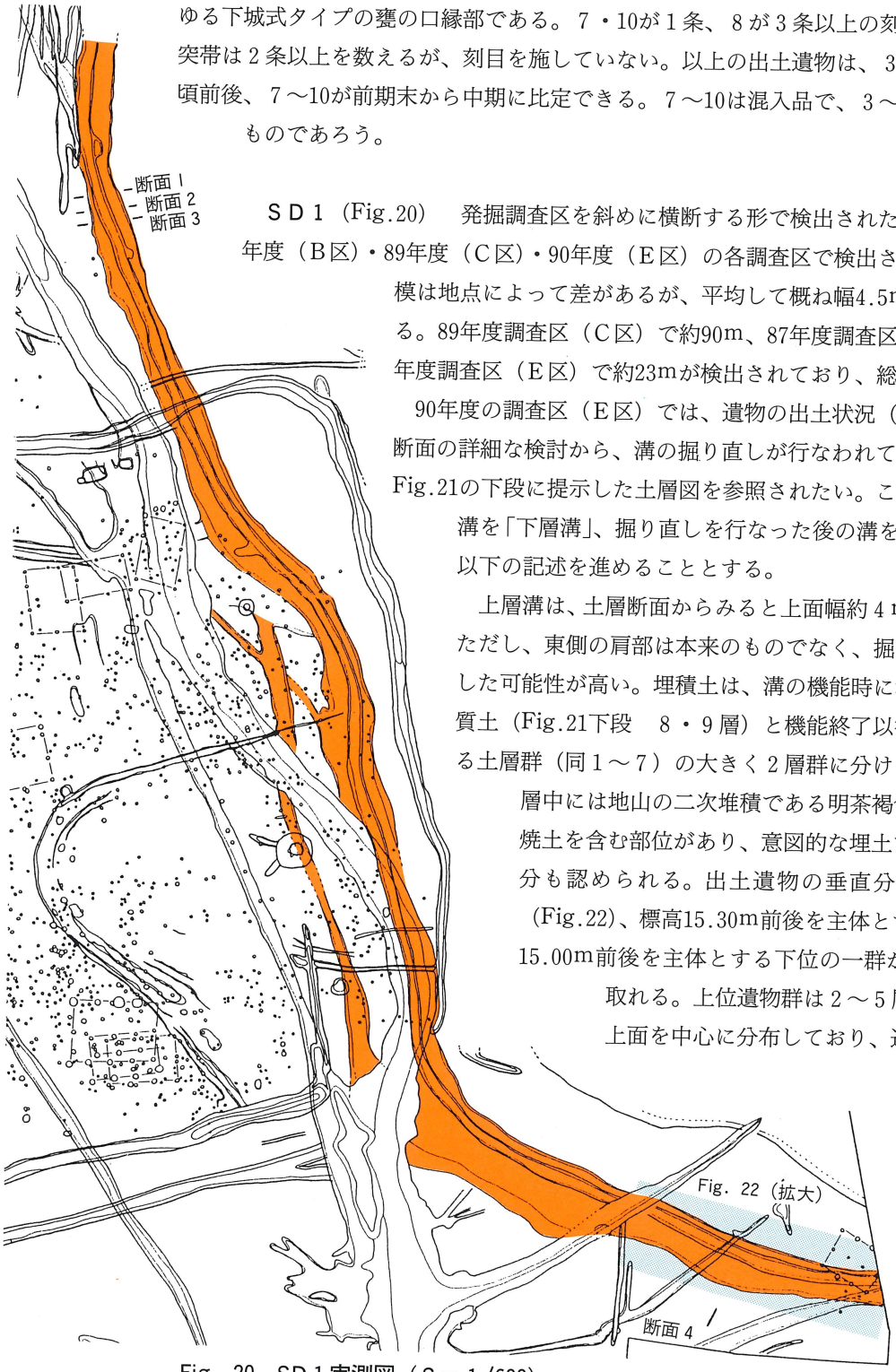


Fig. 20　SD１実測図（S＝1/600）

位遺物群（Fig.27）には破片資料が多いが、弥生時代後期末に比定されるものが布留式段階の資料と混在している。上位遺物群と下位遺物群には、後者が若干の古い資料を混在するものの、両者の時間的な隔たりは大きくはない。以上のことは、ＳＤ１の廃絶時期を示唆する事象であると考える。

下層溝は、上層溝の構築により詳細な規模の推定ができない。本来は二段掘りの掘方を有すると思われ、検出面からの深さは約1.6mを測る。底面から50cm程には粘質のシルト層が堆積しており、一時期滞水する状況にあったことが推定される。シルト層の上には流水の痕跡を示す砂質土が堆積している。この地点の埋土中に包含される遺物は小量で破片が多く、下層溝の詳細な掘削時期を決める資料は存在しない。

次に上記の90年度調査区（Ｅ区）の所見をもとに、89年度調査区（Ｃ区）におけるＳＤ１の土層断面を検討したい（Fig.21参照）。当該土層図では、５層（灰褐色土）と６・７層（褐色土・灰オリーブ褐色土）との層界に比較的明瞭な整合面が認められた。90年度調査区（Ｅ区）での所見を参考にすれば、これが上層溝と下層溝の層界となることが推定される。上層溝埋土に相当する１～５層からは小型丸底壺（Fig.26—26）や二重口縁の小型壺（同27）など布留式段階の土器が、下層溝埋土に相当する６層以下では弥生時代後期末の土器が出土している。特にFig.21上段に提示したように、土器の出土地点と土層図の対応関係を検討すると、当地域で弥生時代後期末に比定される尖底状の底部を有する在地系の甕（Fig.26—22・23）が、下層溝のほぼ底面から出土していることが注目される。これらはＳＤ１（下層溝）の構築時期を示唆する遺物であると考えられる。

以上の検討より、ＳＤ１は弥生時代後期末前後に下層溝の掘削が行なわれるが、短期間で埋没する。その後、古墳時代前期の布留式の時期に掘り直しが行なわれ、上層溝が構築されるが、上層溝もさほど時間の経過を経ずに布留式段階の時間幅の中で埋没をほぼ終了する。なお、ＳＤ１下層溝は89年度調査区（Ｃ区）内で沖積低地の縁辺部にぶつかる部分を検出しているが、

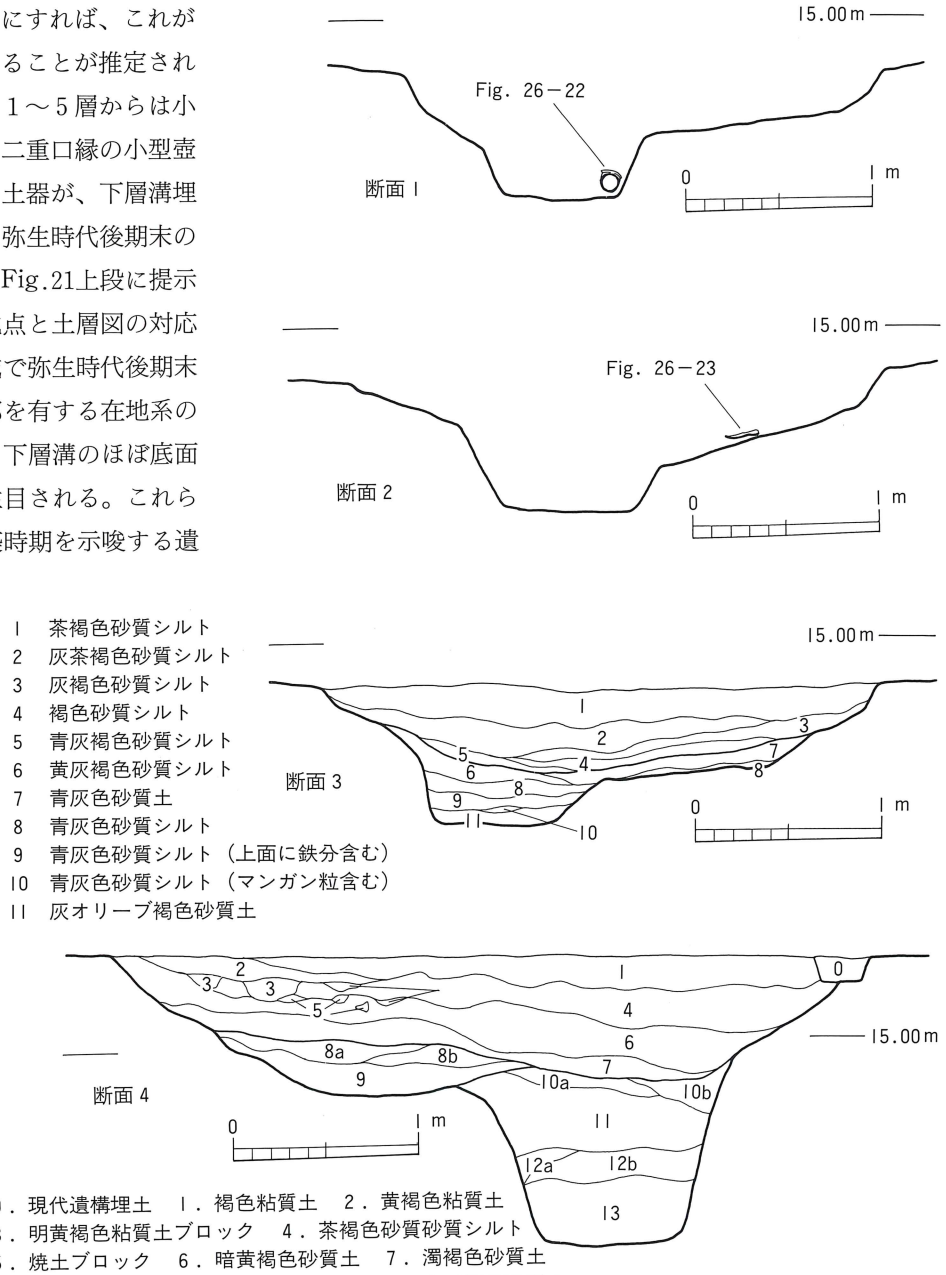


Fig. 21　SD１土層断面図（Ｓ＝１/40）

上層溝はさらに延長され、F区で検出された溝SD8に接続する。当該遺構の詳細な性格は不明であるが、埋土の性状より、上層溝、下層溝とも流水の痕跡が窺われることや沖積低地縁辺部に位置することなどより、水田経営に伴う水路である可能性を考えたい。このように考えると、弥生時代後期末に構築された下層溝が、古墳時代前期の布留式段階になって延長されることは、水田可耕地の拡大を指向している状況が窺え、興味深い。

出土遺物（Fig.23～31）　SD1の出土遺物を、以下調査地点ごとに紹介する。

Fig.23・24—1～19は87年度調査区（B区）の出土遺物である。1～7は壺である。1・2は複合口縁壺で、2は口縁部の接合部で剝離しており、剝離面は擬口縁逆形を呈する。3の口縁形態は不明だが、胴部中位に断面方形の突帯を有する。4は口縁を欠損するが、やはり複合口縁壺であろう。8～13は甕で、形態の特徴から8～12は布留式、13は弥生時代後期末に比定できる。14は円筒形を呈する小型の鉢で、弥生時代後期末と推定される。15は布留式に特徴的な鉢で、胎土が赤褐色を呈し、在地の土器の胎土と異なる印象を受ける。16は高坏で、屈曲する脚部を有する。17は大型器台の破片で、口縁外面に櫛描平行文と波状文および貼付浮文を施す。弥生時代後期末の所産である。18・19は小型の鉢で、18の年代は不詳だが、19は小さな平底を呈することから、弥生時代後期末に比定できる。

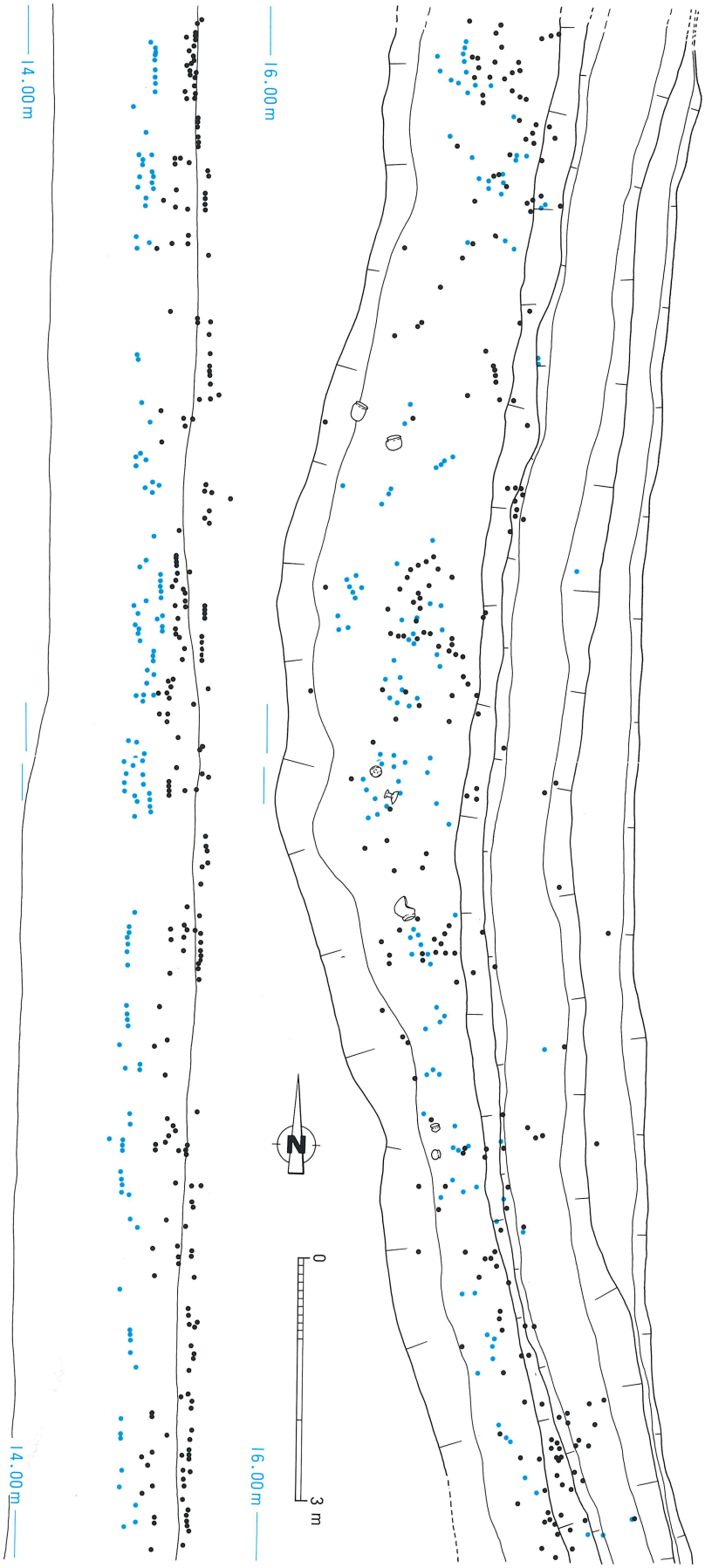
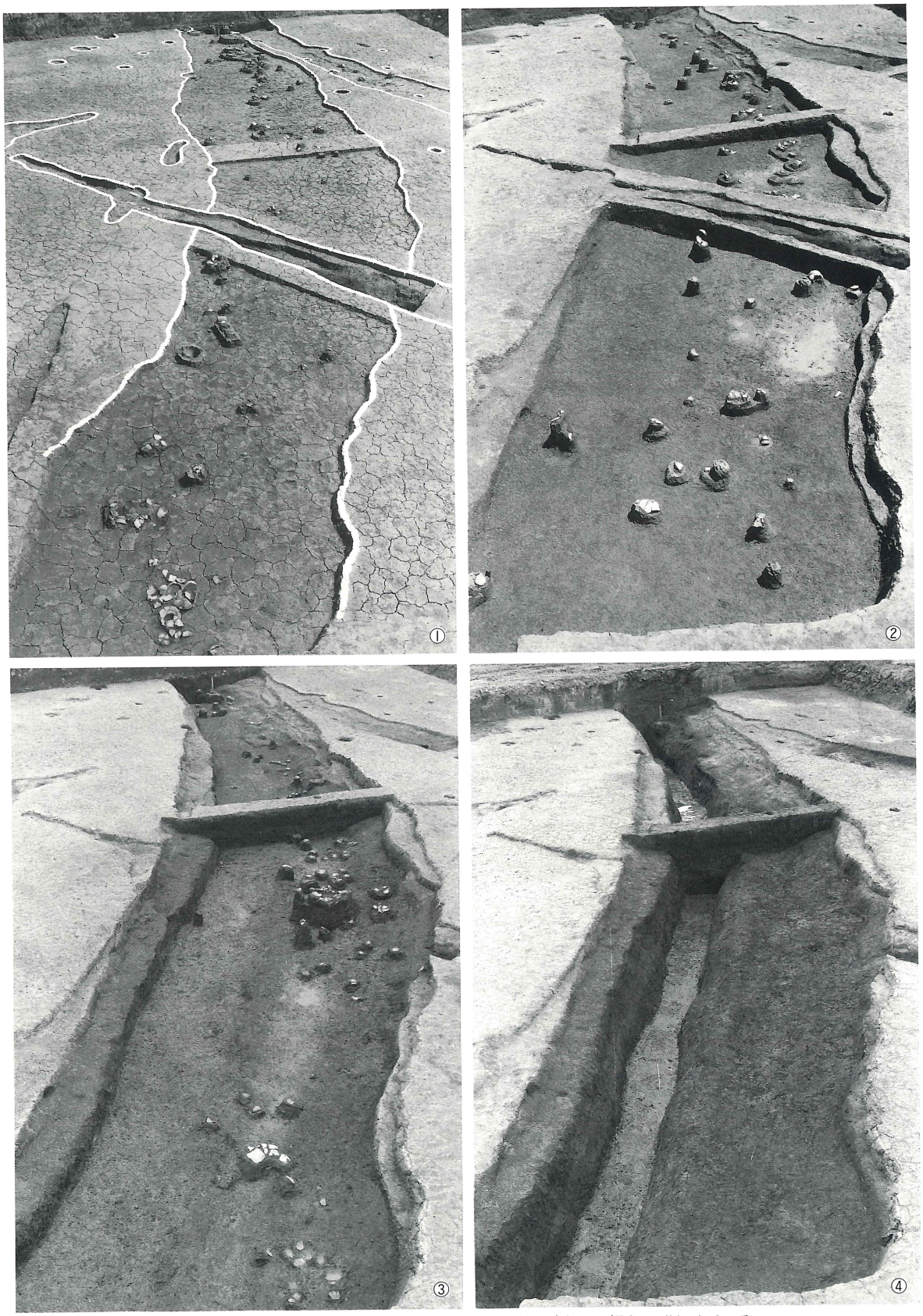


Fig. 22　SD1　90年度調査区（E区）の土器出土状況



①発掘開始後、上面を５cm程度掘り下げた状態。完形に復元される土器がすでに顔をのぞかせている。
②検出面から30cm程度掘り下げた状態。土層観察用ベルト付近では、完形の土器とともに焼土・地山土ブロックが認められた。以上が上層溝上位土器群。
③上層溝（掘り直しの溝）を床面まで掘り下げた状態。遺物は破片資料が多いが，上層溝下位土器群。
④溝Ⅰ完掘状況。下層溝を床面まで掘り下げた状態。

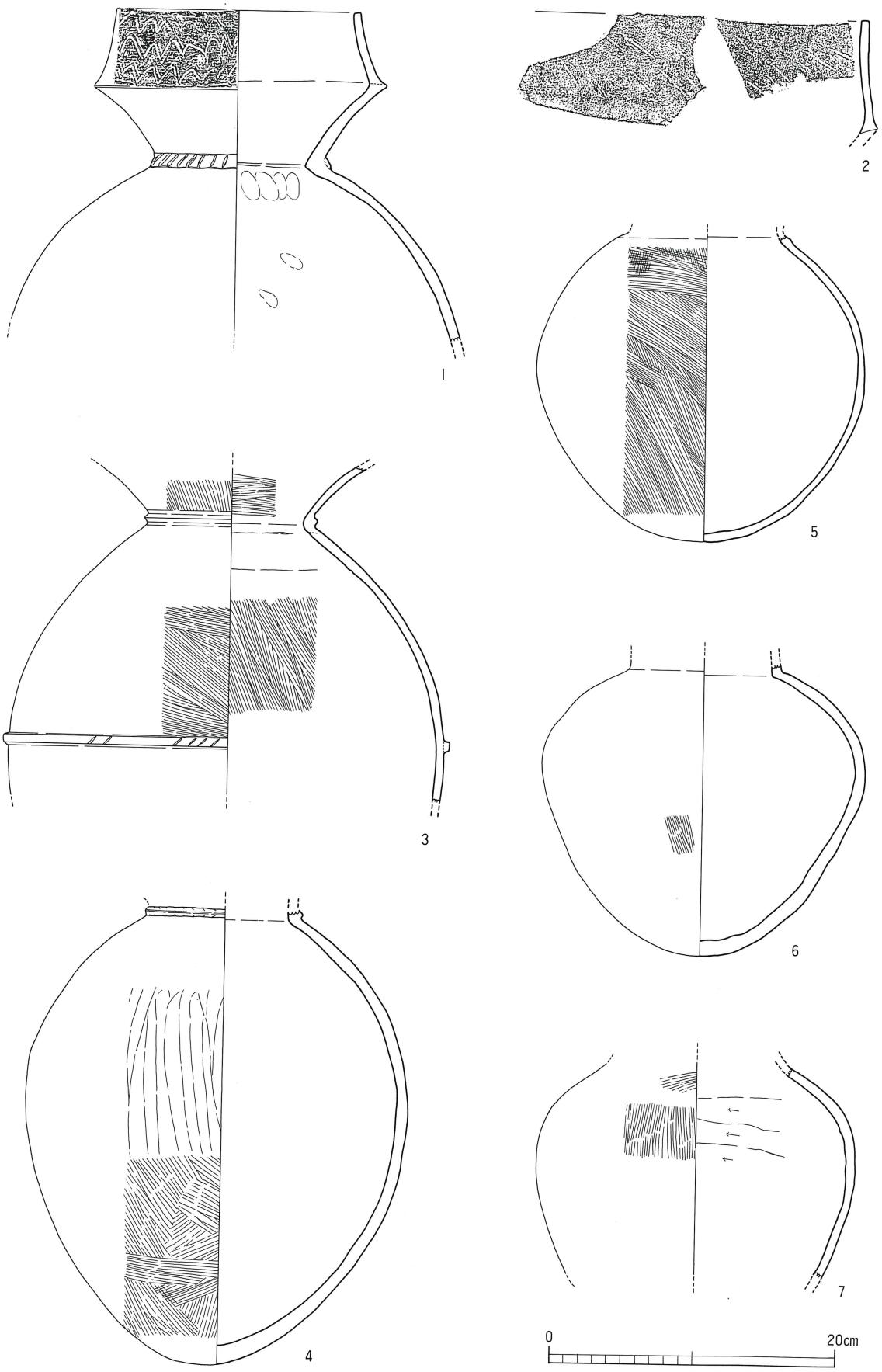


Fig. 23　SD 1　87年度調査区（B区）出土遺物①（S＝¼）

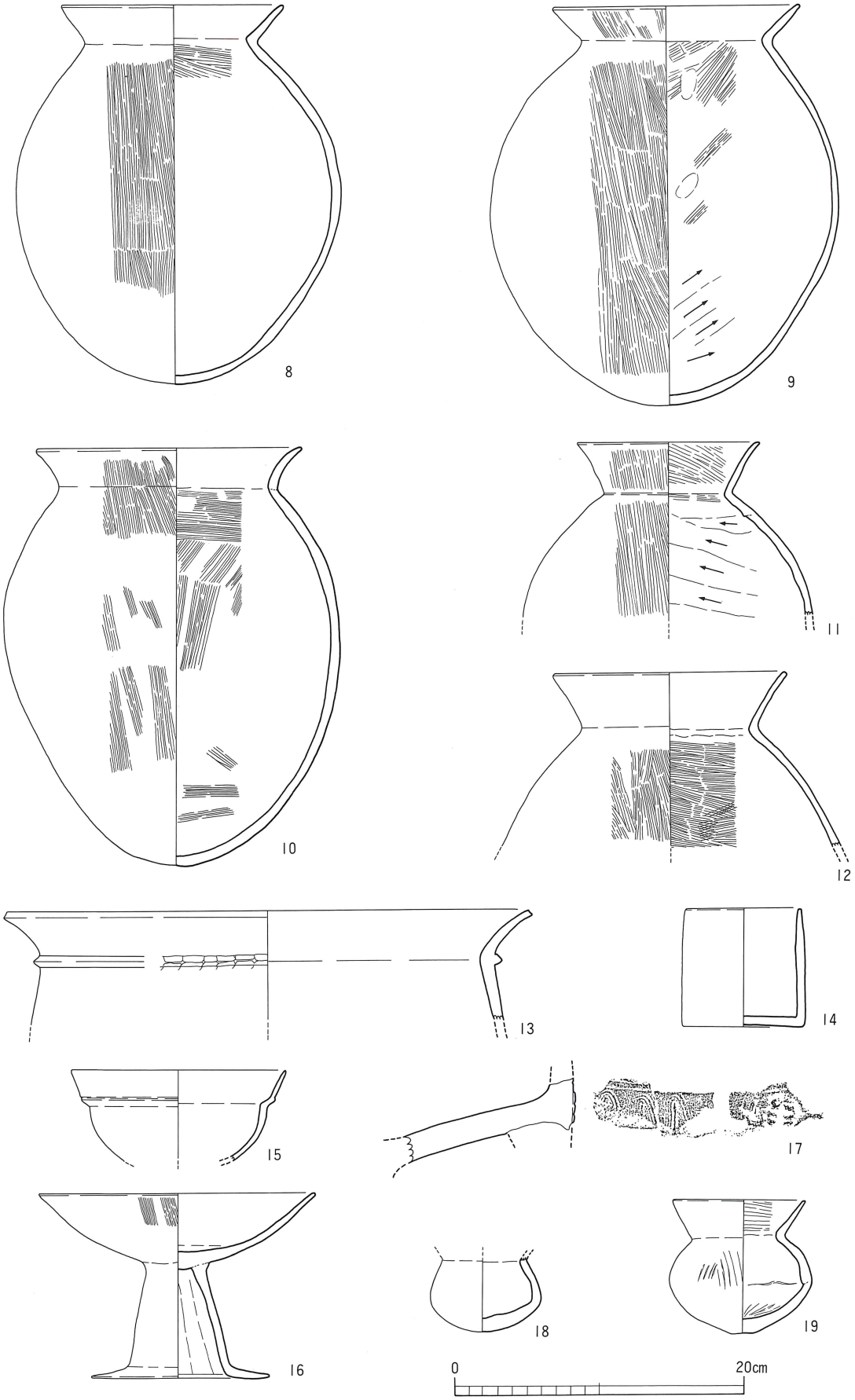


Fig. 24　SD 1　87年度調査区（B区）出土遺物②（S＝¼）

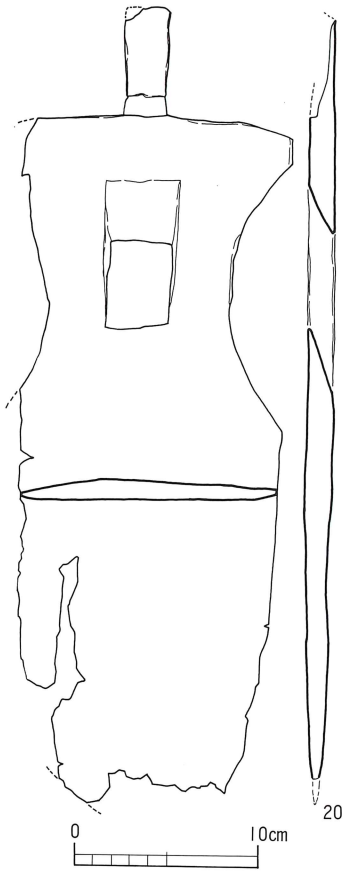


Fig. 25　SD 1　89年度調査区（C区）
出土遺物①（S＝¼）

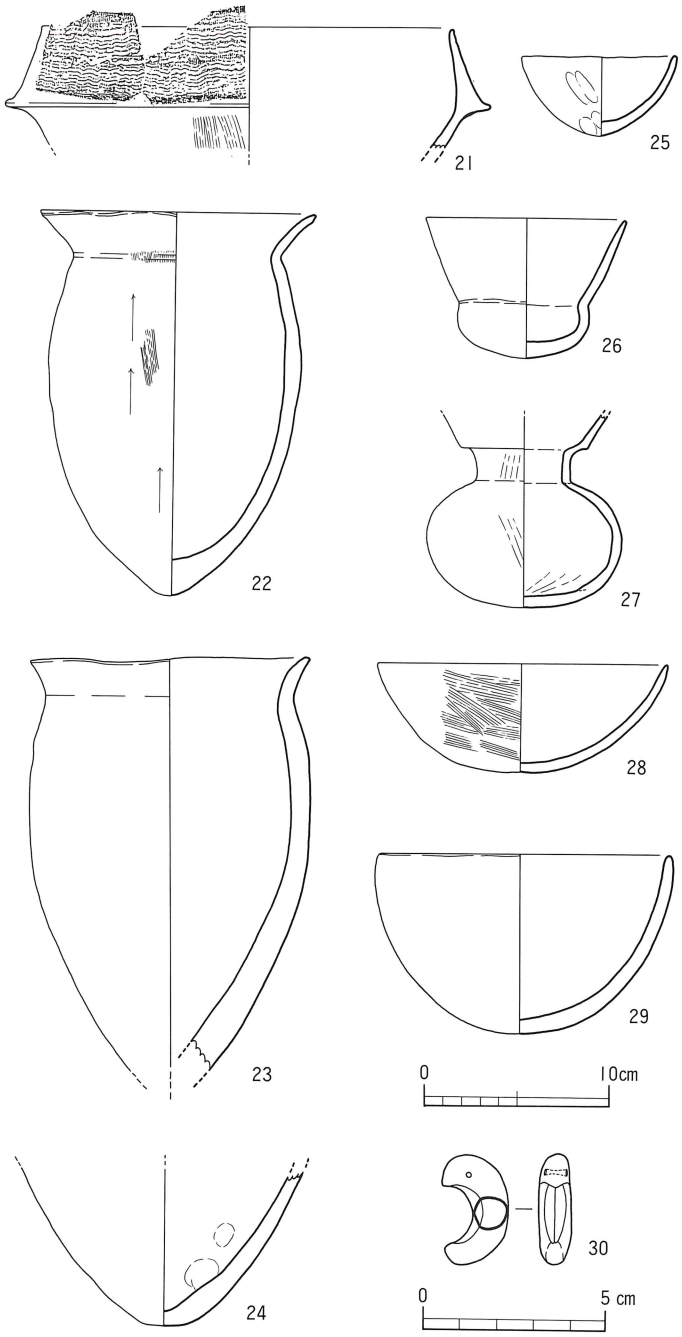


Fig. 26　SD 1　89年度調査区（C区）出土遺物
（21〜29はS＝¼、30はS＝½）

Fig.25・26—20〜30は89年度調査区（C区）の出土遺物である。20は木製の組合せスキであり、柄の装着・連綴のためのほぞ穴と抉り部および突起部を有する。下層溝の二段掘りの掘方下位から出土しており、弥生時代後期末前後に比定される。21は櫛描波状文を有する複合口縁壺である。22〜24は尖底状あるいは痕跡的な平底を有する甕で、いずれも弥生時代後期末に比定できる。下層溝の底面付近から、出土している(22・23の出土部位については、Fig.21上段参照)。25は小型の埦で、外面に指頭痕が目立つ。26は布留式に特徴的な小型丸底壺で、上層溝の埋土中から出土している。27も布留式に特徴的な口縁形態を呈する小型の壺である。28は外面にハケメ、内面にナデを施す。29はやや深めの器高を有する鉢である。下層溝の埋土中より出土しており、弥生時代後期末に比定される。30は滑石製の勾玉で、両面穿孔である。腹部に抉ったような面取りがあり、そのために断面が丸くならず、特徴のある断面形となっている。このような形態の勾玉は、古墳時代前期以降に出現するものである。

Fig.27〜31—31〜76は90年度調査区（E区）の出土遺物で、いずれも上層溝の埋土中から出土したものであるが、31〜38は下位遺物群、39〜76は上位遺物群として取り上げたものである。31は口縁を欠損するが、わずかに残存する頸端部の状況から、畿内系の二重口縁を持つものと推定される。32は在地系の複合口縁壺の系譜上に位

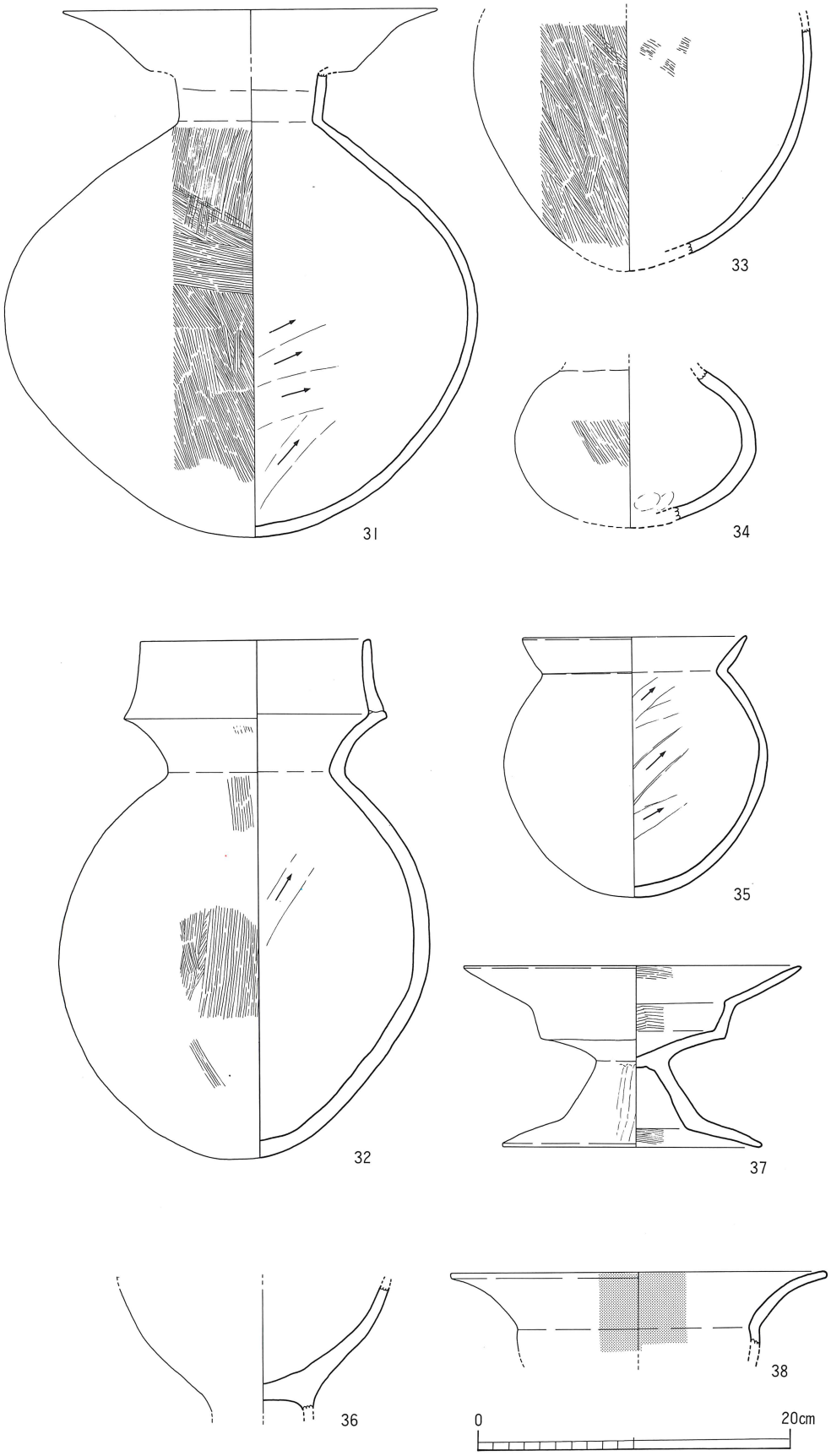


Fig. 27　SD 1　90年度調査区（E区）出土遺物①（S＝¼）

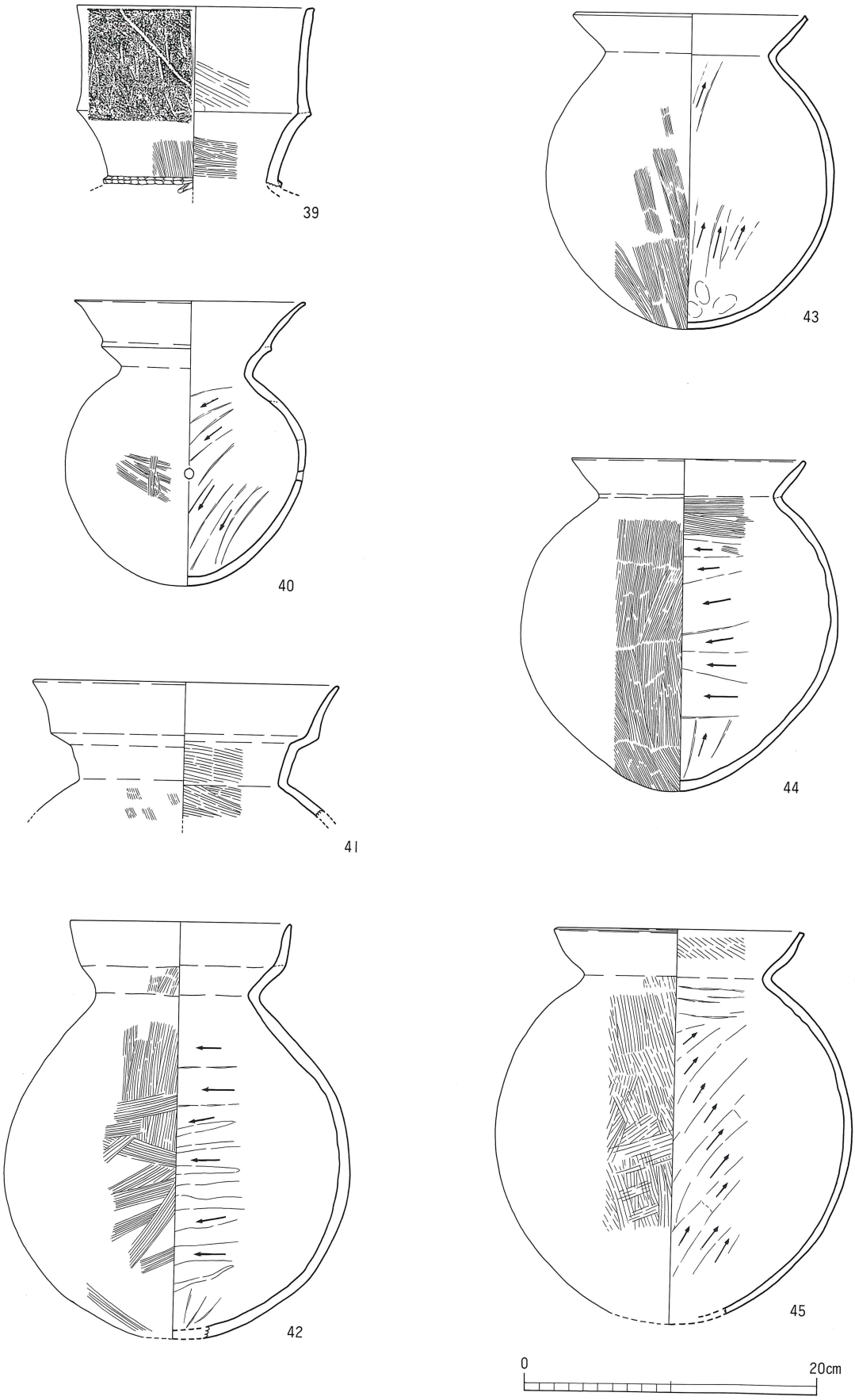


Fig. 28　SD 1　90年度調査区（E区）出土遺物②（S＝¼）

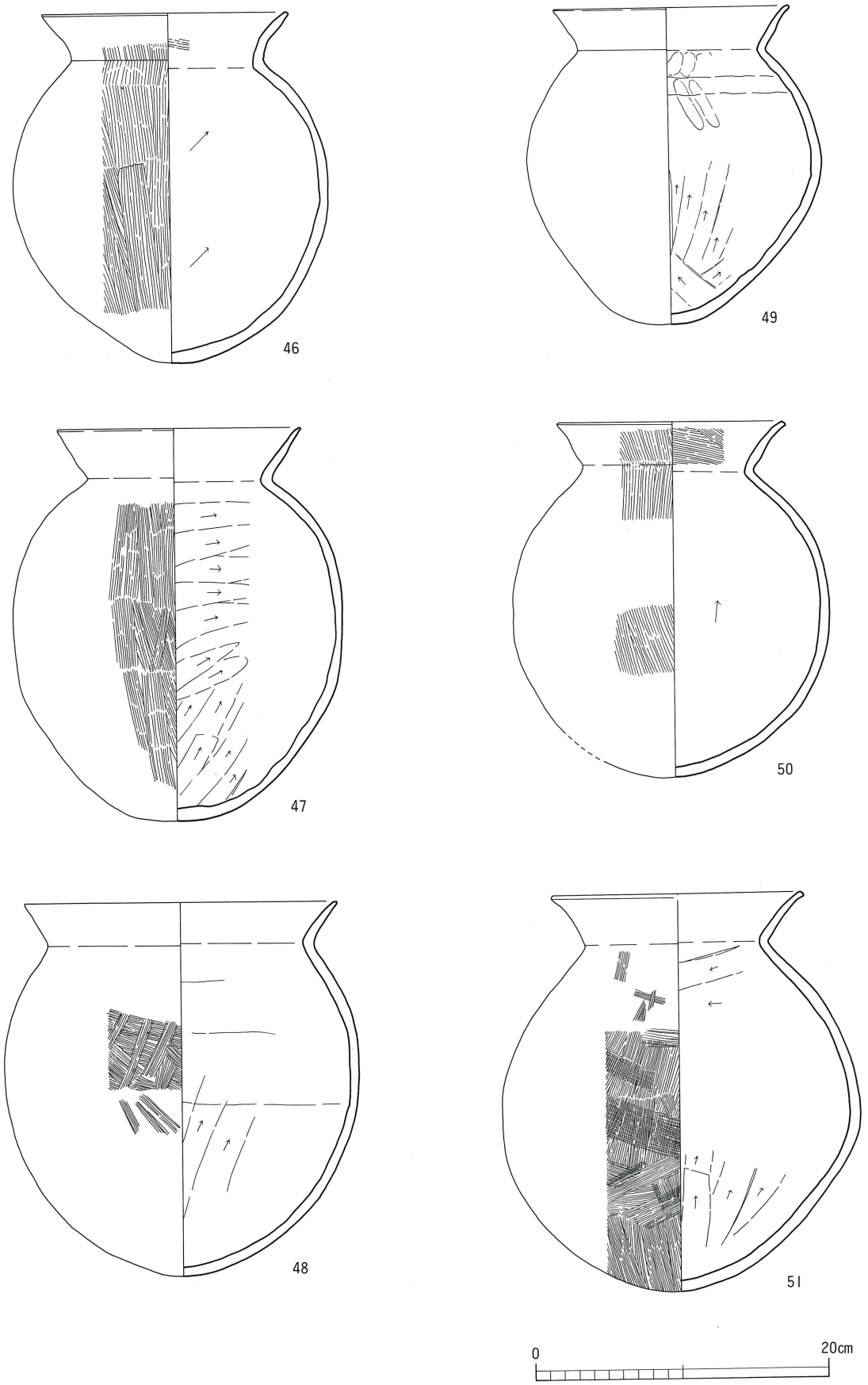


Fig. 29　SD 1　90年度調査区（E区）出土遺物③（S＝¼）

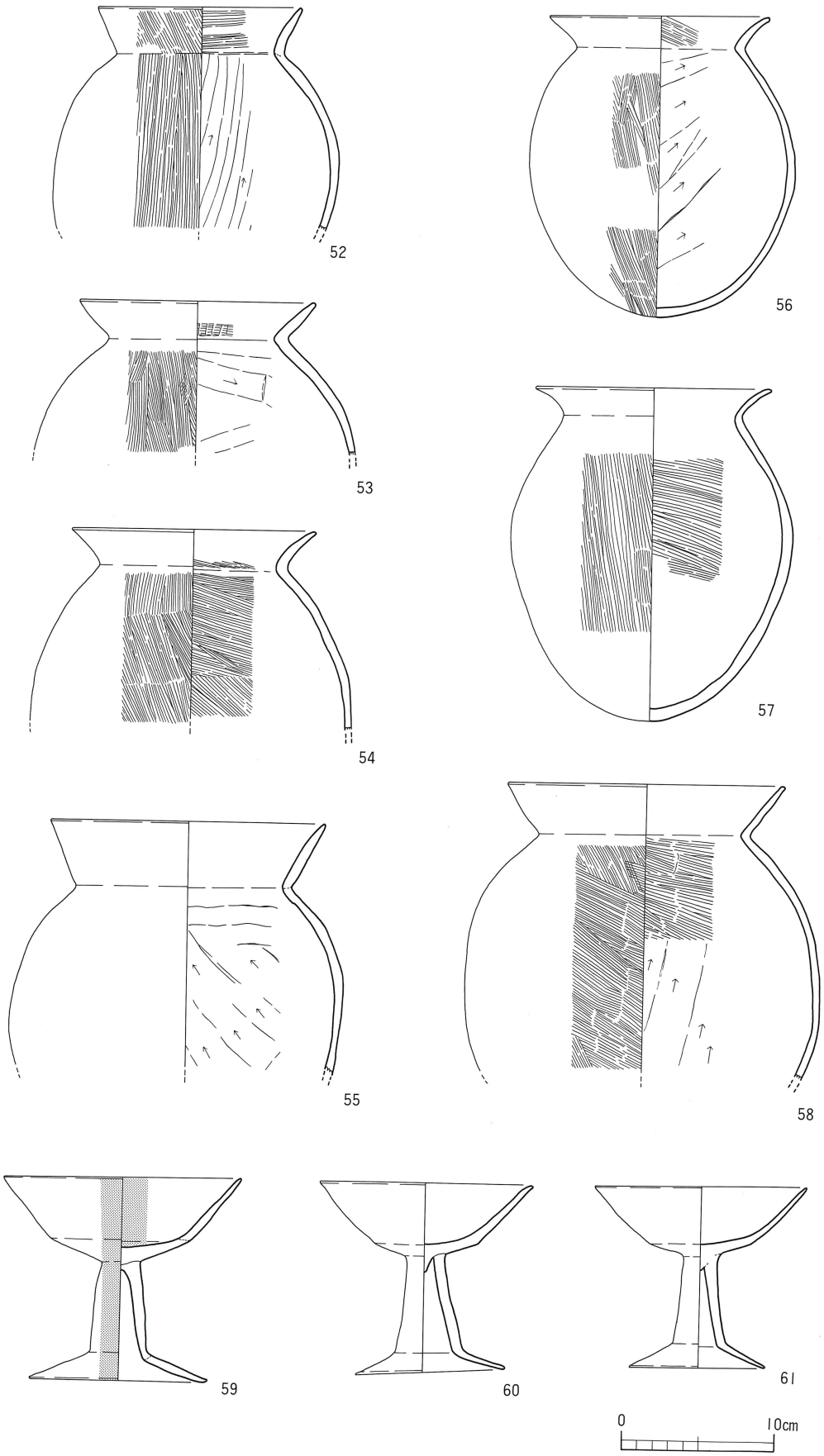


Fig. 30　SD 1　90年度調査区（E区）出土遺物④（S＝¼）

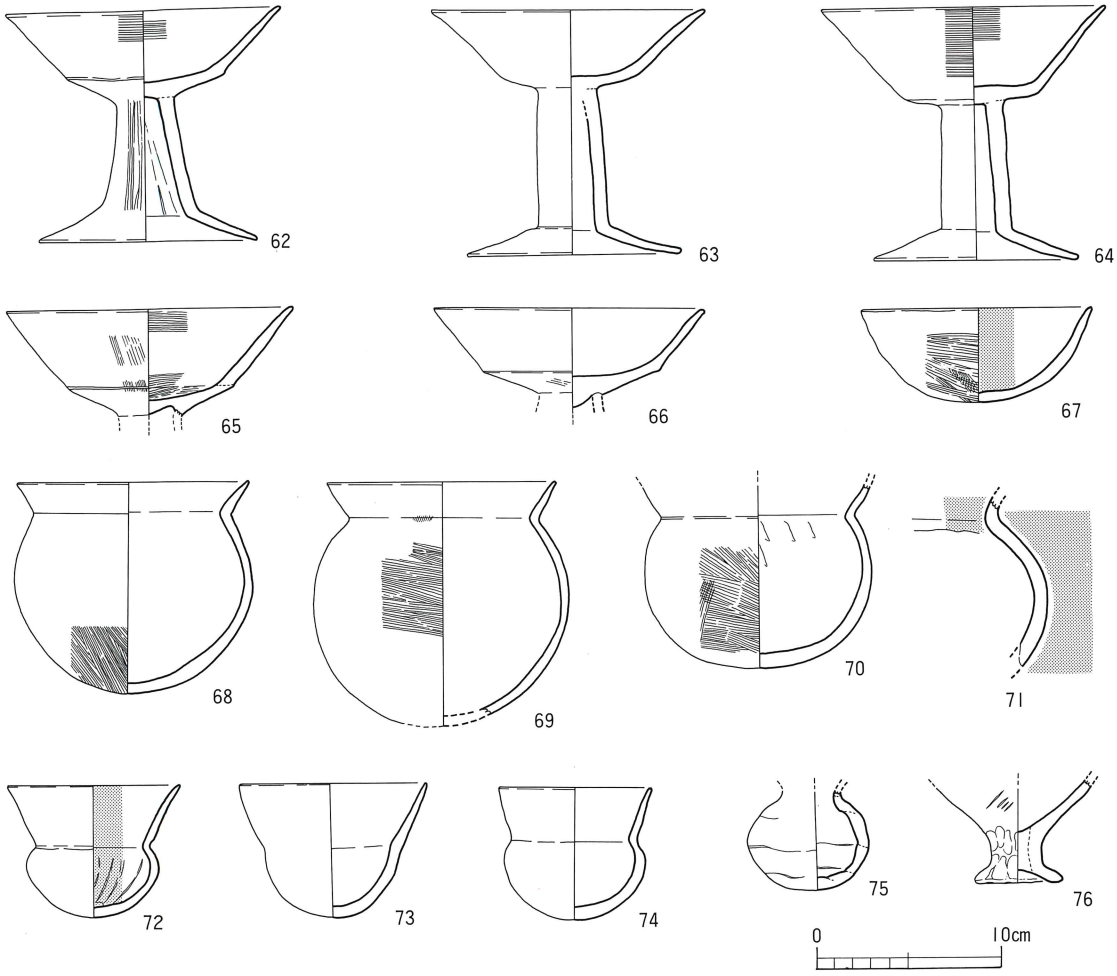


Fig. 31　SD 1　90年度調査区（E区）出土遺物⑤（S＝¼）

置づけられるものであるが、口縁外面に櫛描波状文がなく、胴部が球状を呈するなど古墳時代前期の様相を持つ。33は外面にハケメ、内面にハケメの後ナデを施す壺の胴部である。34は口縁を欠損し、丸味を帯びた胴部を呈する。35は小型の甕で、内面に削りが認められる。36は器種不明の破片である。37は二段に屈曲する口縁を有する高坏で、畿内を中心とする外来系の系譜上に位置づけられるものである。38は内外面に赤色顔料を施す高坏で、これは在地系の器形を呈するものである。下位遺物群として取り上げたものは、31・32・37のように布留式段階に比定されるものと36・38のように弥生時代後期末に比定されるものが混在している。

39～76は上位遺物群として取り上げたもので、当地域における布留式段階の良好な一括資料である。39は在地系の複合口縁壺であるが、弥生時代のものと比較して口縁部が外反気味に開くことや櫛描波状文がかなり崩れた印象を受けることなど、布留式段階併行期の特徴を具現しているものと考えられる。40は二重口縁を有する中型の壺で、精選された粘土で焼成されている。胴部中位には焼成前に穿たれた小孔を有するのにもかかわらず、胴部外面にはススの付着が目立ち、この土器の用途の特殊性を窺わせる。41は布留式段階に特徴的な畿内系の二重口縁壺である。42も二重口縁壺であるが、胴部最大径が胴部中位よりやや下に位置することや口縁部の処理などがだれた印象を受けるものである。胴部外面にハケメ調整、内面に削りが認められ、口縁内外面周辺にはナデを施している。43～45は甕で、球形の胴部や口縁端部の処理などに、布留式段階の特徴がよく現われている資料である。特に43の底部内面付近には指頭痕が認められ、当該時期の甕にしばしばみられる特徴的な痕跡であることが注意される。46～58も甕で、形態や調整に小異がみられるが、胴部内面に削り調整を施すものが多い。59～66は高坏で、59の坏部内外面および脚部外面には赤彩が認められる。67は外面にハケメ調整が施される坏で、内面

に赤色顔料の塗布がみられる。68～71は丸底で、口縁がラッパ状に開く鉢である。71の残存している胴部外面と口縁内外面には、赤彩が認められる。72～74は小型丸底壺で、72の内面には赤色顔料を塗布している。75は手ヅクネ整形による小型の土器で、ミニチュア土器の可能性が考えられる。76は製塩土器の可能性が高く、脚台を有し、胴部外面に叩きの痕跡が認められる。叩きの形状は荒く、器面も風化している。脚部外面には指頭痕が顕著である。

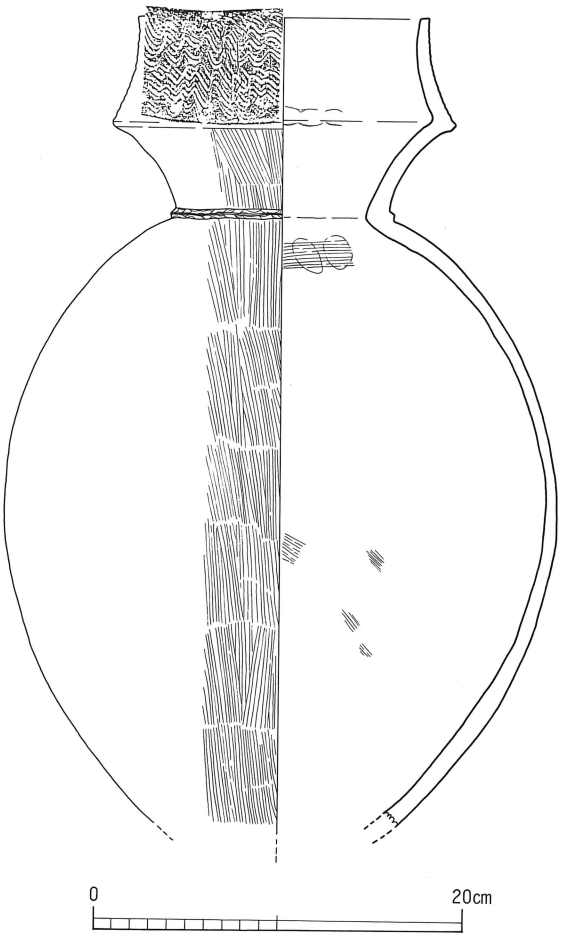


Fig. 32　SD２　出土遺物（S＝¼）

ＳＤ２　89年度調査区（Ｃ区）で検出された溝で、ＳＤ１に接続あるいは付属するものである。古墳時代の遺構ＳＲ１や中世の遺構によって攪乱されている部分もあるが、その規模は幅1.5m前後、延長42m、深さ0.4mを測る。埋土中に砂質土の堆積があり、流水の痕跡が認められる。出土遺物は少量であるが、ほぼ完形に復元される複合口縁壺が検出されている。

出土遺物（Fig.32）　図示した遺物は複合口縁壺である。複合口縁部が大きくのびており、その外面に櫛描波状文を施す。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭に比定されるであろう。

ＳＤ３～10（Fig.33）　90年度調査区（Ｆ区）で検出された溝である。後世の遺構の構築や削平によって残存状況が良好でないものもあるが、各溝の埋土中には砂質土の堆積がみられ、流水の痕跡が認められる。各溝の規模と時期を列挙しておく。

ＳＤ３　幅1.6m、深さ0.4m、延長７m。出土遺物が少なく、時期不詳。ＳＤ４に切られる。

ＳＤ４　幅1.2m、深さ0.5m、延長55m。出土遺物が少なく、時期不詳。

ＳＤ５　幅2.0m、深さ0.7m、延長21m。出土遺物が少なく、時期不詳。ＳＤ８に切られる。

ＳＤ６　幅1.8m、深さ0.5～0.8m、延長36m。出土遺物が少なく、時期不詳。平面形態が逆Ｌ字状に屈曲し、ＳＤ８と接続する。ＳＤ８とＳＤ６の接続部には、拳大の川原石を積んだ堰状の施設（Fig.34参照）がみられる。

ＳＤ７　幅1.2m、深さ0.5m、延長13m。出土遺物が少なく、時期不詳。

ＳＤ８　幅3.0m、深さ0.8m、延長36m。ＳＤ８上層溝の延長部に相当する。埋土中より、布留式段階の小型器台が出土。

ＳＤ９　幅1.6m、深さ0.5m、延長19m。布留式段階の甕、および勾玉が出土。

ＳＤ10　幅1.0m、深さ0.4m、延長７m。いわゆる５の字状口縁の甕が出土。

このうちＳＤ３・ＳＤ５は、切り合い関係から布留式以前の弥生時代後期末前後に位置づけられる可能性が高い。またＳＤ７も検出された位置関係から、ＳＤ５に対応する溝である可能性が考えられる。ＳＤ６・ＳＤ８・ＳＤ９・ＳＤ10は出土遺物から、布留式段階の古墳時代前期に位置づけられる。ＳＤ４は時期不詳であるが、切り合い関係よりＳＤ３より新しい時期に属する。

出土遺物（Fig.35・36）　Fig.35―１・２はＳＤ９出土の甕である。胴部外面にハケメ調整、内面に削りを施

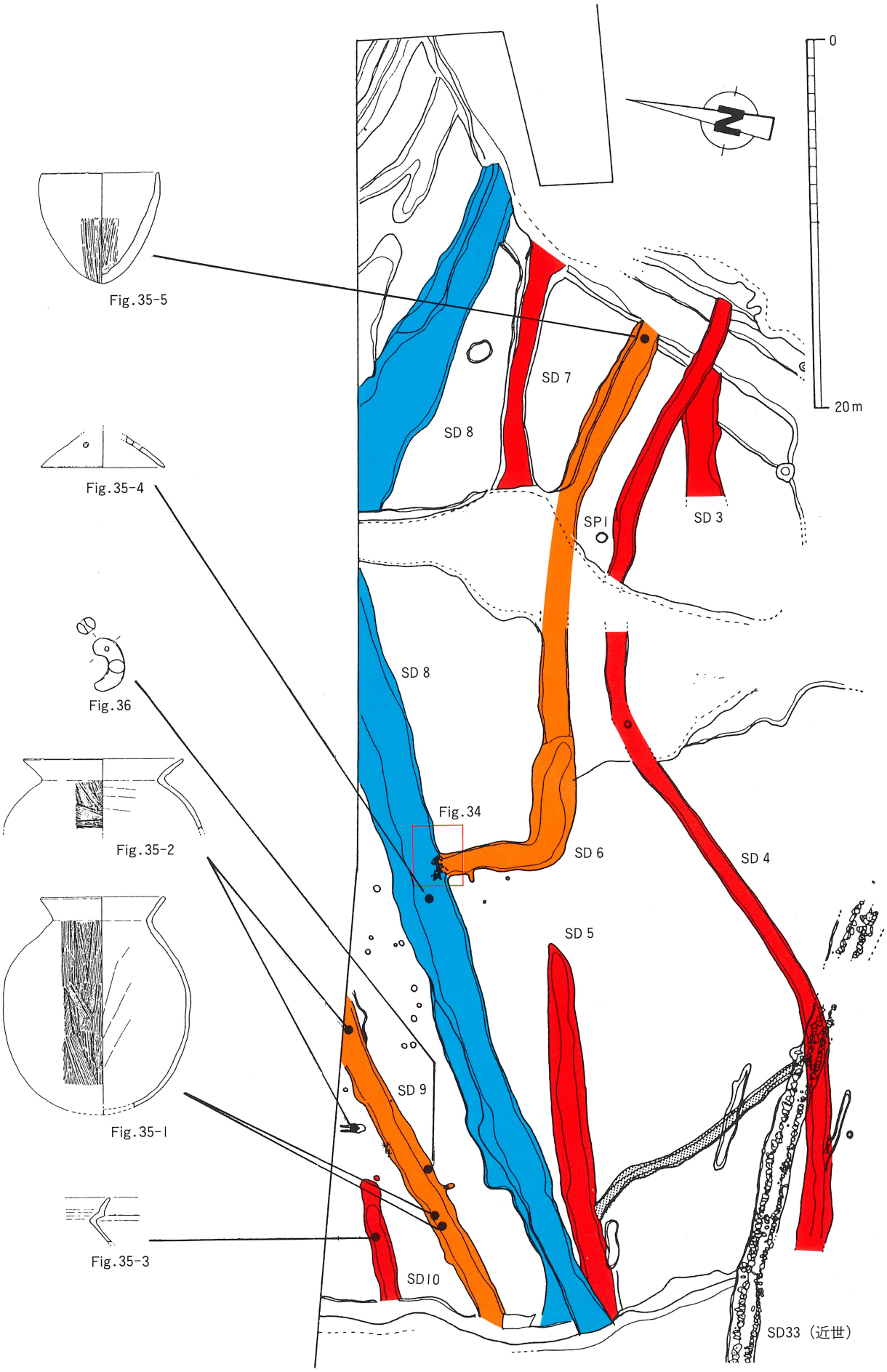


Fig. 33　SD 3 ～10と遺物出土地点

す。３はＳＤ10出土の甕の口縁で、いわゆる５の字状口縁と呼称される山陰系土器の範疇に属する可能性を有するものである。４はＳＤ６出土の小型器台で、布留式に特徴的なものである。外面に赤色顔料の塗布がみられる。５は尖底状の底部を有する鉢で、内外面ともにミガキ調整および赤色顔料の塗布が認められる。Fig.36はＳＤ９出土の勾玉で、材質は滑石、穿孔は両面穿孔である。以上の出土遺物は、布留式段階併行の古墳時代前期に位置づけられるものであろう。

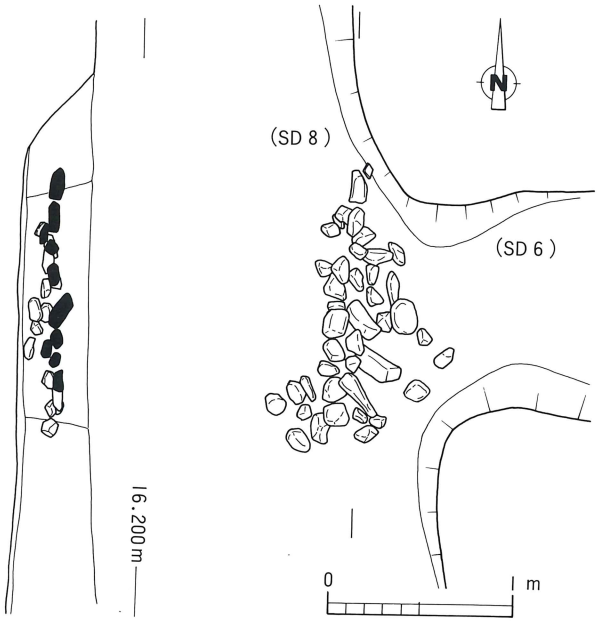


Fig. 34　SD６とSD８の接続部

小結　稙田市遺跡における弥生時代から古墳時代前期の遺構としては、溝があげられる。このうち弥生時代後期中頃前後に比定されるＳＤ11・ＳＤ12については、調査区の制約のためその全貌が不明であるが、本調査区周辺ではそれほど大規模な展開を示す状況にはない。

それに対して、弥生時代後期末から古墳時代前期に比定されるＳＤ１からＳＤ10は、沖積低地の縁辺部に構築されて以降、拡張を繰り返すこととなる（Fig.37参照）。溝の構築状況を時期ごとに検討して、この項の結びとしたい。

弥生時代後期末前後には二段掘りのＳＤ１（下層溝）が掘削される。当該溝は深さ1.6m、延長123mを測る大規模なもので、埋土に砂質土の堆積が認められることから、流水があったことが窺われる。掘方の底面近くから、底部が尖底状を呈する甕（Fig.26―２・３）が出土しており、これらが掘削の時期を示唆する遺物と考えられる。また90年度調査区（Ｆ区）で検出した溝ＳＤ３・ＳＤ５も切り合い関係からみて、ＳＤ１（下層溝）に併行する時期に機能していた可能性が高いが、出土遺物に良好なものがない。

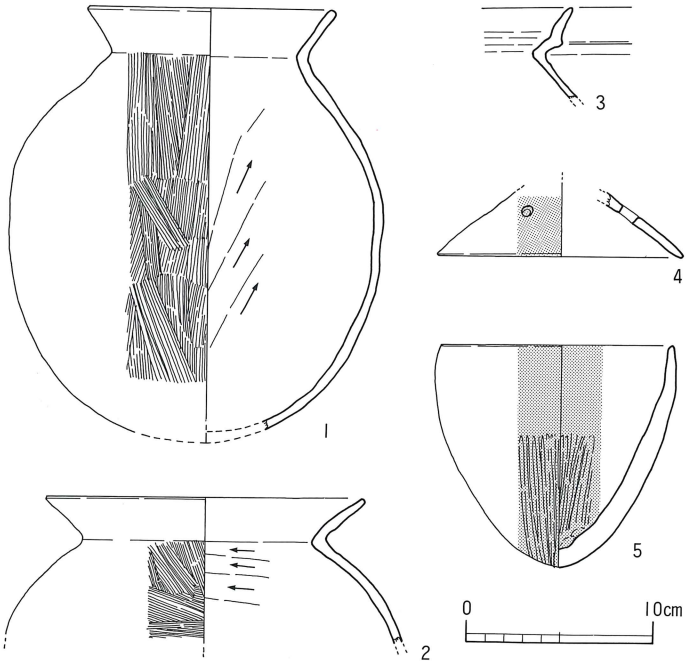


Fig. 35　SD３～10出土遺物（S＝¼）
（１・２　SD９　３　SD10　４　SD８　５　SD６）

ＳＤ１（下層溝）は弥生時代の時間幅の中で堆積を終了し、布留式併行期の古墳時代前期には溝の掘り直しが行なわれ、ＳＤ１（上層溝）の掘削が行なわれる。この段階になるとＳＤ１（上層溝）は東側に延長され、ＳＤ８とした溝に接続する。ＳＤ１上層溝とＳＤ８の総延長は220m、深さは0.8mを測る。さらにＳＤ８にはＬ字状に屈曲するＳＤ６が接続され、接続部には川原石を２～３段に組んだ堰状の遺構が設置されていた。また出土遺物より、ＳＤ９・ＳＤ10も当該時期に位置づけられる。

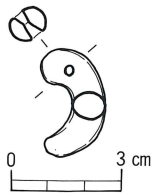


Fig. 36　SD９
出土勾玉（S＝½）

稙田市遺跡で検出された、以上の溝の詳細な性格は不明である。ただし埋土の性状か

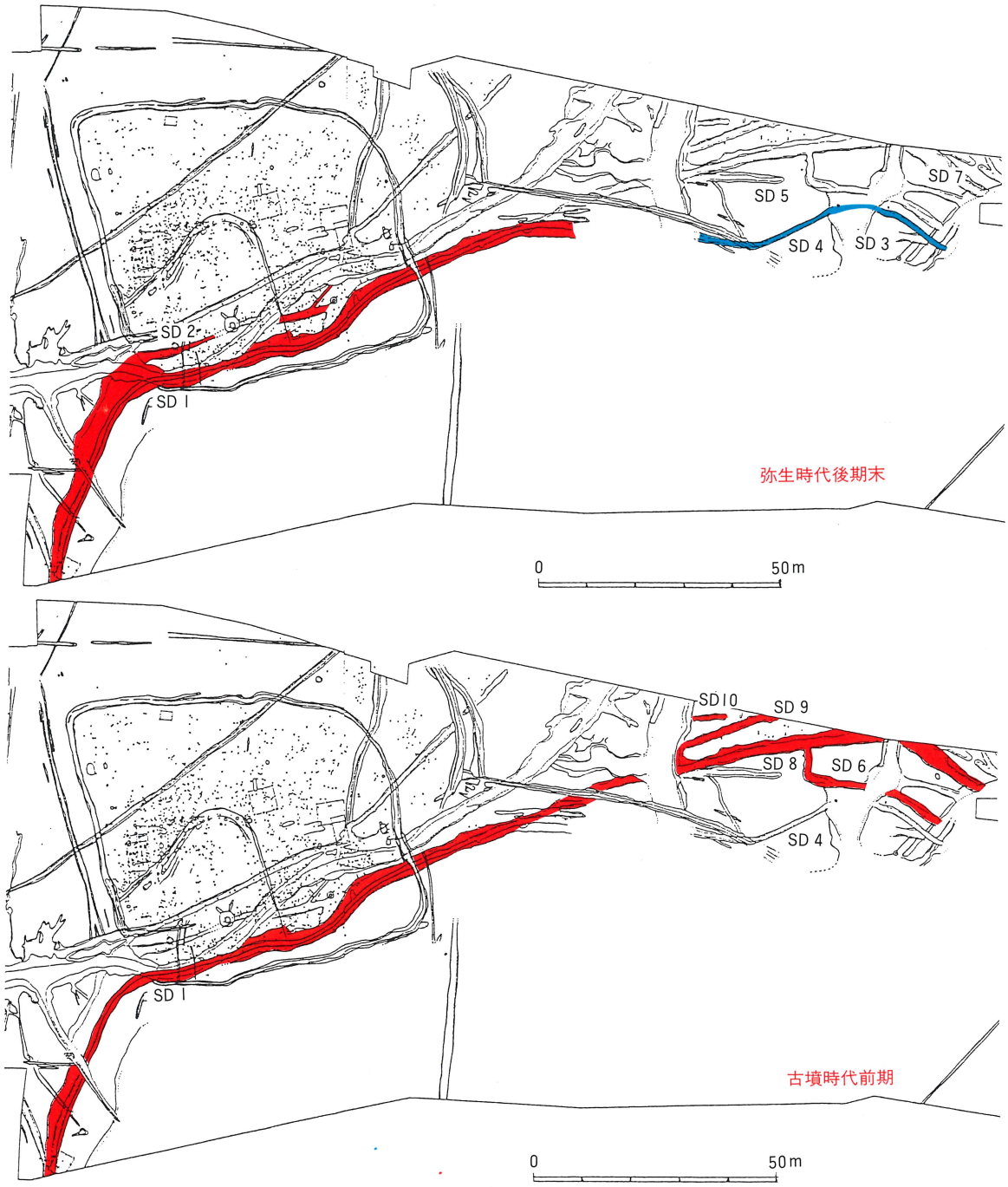


Fig. 37　植田市遺跡における弥生時代後期末から古墳時代前期の溝

ら流水の痕跡が認められることや沖積低地の縁辺部に位置することなどから、水田経営に伴う水路である可能性が高い。溝の周辺からは、後世の遺構の構築による削平も手伝って、水田遺構を直接的に示す畦畔や水口などの検出に成功しておらず、上記の推定も確定的なものとはいえない。もし、これらの溝が水田経営に伴う水路であるとするならば、弥生時代後期末前後に初めて構築された溝が、古墳時代前期の布留式段階に延長され、さらにほかの溝と連結されるなど、施設としての整備が行なわれてゆく状況がみられることに注意をしておきたい。これらの布留式段階における上記の溝の拡張・整備は、水田可耕地の拡大を指向すると解釈できるからである。今後はさらに遺跡の状況が良好な地点で、当該時期の水田遺構そのものを発見する努力が必要とされると同時に、溝の時期に対応する集落遺跡を探索することが必要であろう。